

服部氏

漢文新讀本詳解

266

151

卷

貳

特54

881

~~特66~~

~~218~~

漢文新讀本詳解

服部氏

河村定靜詳解

東京

求光閣發行

44. 5. 11

丙辰

漢文新讀本詳解

文學博士服部宇之吉編 川村北溟解

第一課 孔子 文學初階

○春秋時後を云ふ、○沮之之さまたぐるを云ふ、○知道終不行の、終に世間に行はれぬと云ふ、○心喪師につかゆるを云ふ、

支那帝國周末に、春秋時代と云ふ時代があつた、其の時孔子と云ふ大聖人がありて、魯の國の昌平郷と云ふ所に生れ出られた、身の長け

は九尺六寸あつたと云ふけれども、是れ支那古代の尺度で、之れを我が國の尺度に改むれば、其の一尺は六寸餘に當るから、五尺八寸近き身の長けとなるのじや、年少の時から禮を好まれ、成長して後、魯國に仕へ司空と云ふ役人となられた、己にして魯の國を去りて齊の國にゆかれたが、齊國の人に孔子を用ゆることを沮ばんだ人がありて、遂に宋と衛の國にゆかれたが、宋衛兩國の人が之れを逐い出した、そこで陳と蔡との二國に適つたが、陳蔡兩國の人々が又之れを困るしめた、是に於いて復た魯の國に還りたが、時に魯君が政權を失ひ、季孫、叔孫、孟孫の徒が國事を擅ましにし、國內が大いに亂れて居た、孔子は其の道の終に行は

れぬと云ふことを知りて、遂に復た出で、仕へぬやうになつた、そうして退隱して詩書禮樂を修め、弟子を集めて教授された、弟子は遠國からやつて來るものもありて、多きこと三千人に至つたこともあつた、年七十三にして、死なれ、弟子共は皆中心から喪服をつけて、三年にして立ち去つたのである。

第二課 孟母斷機 劉向

○孟母 孟子名は軻、字は子輿の母なり、○有賢德行ありとの心、○何所至矣りしぞと云ふ心、○若吾斷斯機也問も、中途にして廢止するときは、何んの役にも立たず、故にしか云ふ、

○旦夕晩まで、

講義 孟軻は三歳の時に、父親を喪ふて、母仇氏に養育された、仇氏は賢夫人の徳行がありて、世のはめものとなつて居た、軻は既に成長して外師に就いて學んで居たが、既に學んで歸つて來た、母孟軻に問ふて曰ふ、汝の學問は、どの邊まで至りしぞと、軻答へて曰ふ、依然としてとの如く、曾て進みし所なしと、母は乃ち刀を以て、其の織りかけた機を中斷してしまつた、軻は懼れて其の故を問ふた、母曰ふ、汝中道にして學問を廢止するは、吾が此の織りかけた、機を中斷すると同一な結果となるものじや、更らに益する所がないではないかと、軻そこで旦夕學

(4)

問を勉強し、更らに休息することなく、遂に大賢人となりてしまつた、そうして齊の國や梁の國々に遊び、其の國王に説くに天下に王たるの道を以てされたけれども、皆孟軻を用ゆることは出来なんだ、そこで退いて其の問人萬章の徒と、難議答問して、孟子七篇を作られた、

第三課 敬師

林 奎

(5)

○何與於師、何にも師に關係した、何にも師に關係した、○誠愛、我也、誠心誠意にて、我が身をい

○以、此爲、心、師は我を愛することの、まことに深きものじや、と云ふことを、心に銘記しておけばと云ふ心、

講義 父母として其の子女を愛せぬものはない、先生も亦其の弟子を愛

せぬものはない、我に善行があれば先生はさつと喜ぶ、我に過失があれば先生は必ず怒る、夫れ善行は我の善行である、過失は我の過失である、何にも先生に關係したことはない、而るに先生は必ず之れを喜び、必ず之れを怒るものは、誠心誠意我を愛する情があるからである、弟子たるものが能く此の心を以て自分の心とすれば、何にも先生の命に違背するやうなことはないものである、

(6)

第四課

白石大志

板倉勝明

○白石

新井氏、名は君美、字は在中、白石は其の號なり、江戸の人、將軍家宣の知を受け従五位下に叙し、筑後守に任じ、終に幕政に與かるに至れり、享保十年五月十九日、病

を以て其の家に卒す、時に年は六十九

○侗儻

卓異なり、又高遠なり、おさへがたき氣象あるを云ふ

○不羈

羈束せられざるを云ふ

心

○負二膽氣

膽力と氣象とを、たゞみにするとの心

○封侯

封ぜられて大名となる

○閻羅

閻魔大王を云ふ

言

丘里の言と云ふに同じ、又莊子に、丘家の言とあり

○潭上

ふちのは

○腮

あざとを云ふ、又お

○晦暝

まつくらが

○他山

ほかの

○瘡痍

きずと訓ず、一尋は六尺を云ひ、又八尺を云ふとあり

講義

新井白石先生は、侗儻不羈にして、自から膽力と氣象を負ふてか

らに、人に降ることを好まぬ人であつた、嘗て慨然として嘆息して曰ふ大丈夫と生れ出てたるものは、生きて居る内に封侯たることを得ぬならば、死んだ後は當さに閻魔大王となりて地獄を賑はすべきであると、既にして節を折りて讀書の人となつた、都下の富豪に、河村瑞軒と云ふ

(7)

人があつて、先生に妻はすに其の女を以てせんとした、且つ三千金にて買ひ入れた所の土地を以て、學術修行の資本に充てんことを請ふた、そうして其の事を自分の長男に命じ、先生に説かしめたのである、先生曰ふ、おまへも亦、丘家の言を聞いたことはないか、昔時、一匹の小蛇がありて、ある潭のほとりに居た、而るにあ人るが微しく其の小の蛇おとがいに瘻を負はせた、所が俄かにして風が起り雨が降り出して、天地共にまつくらになつた、そうして忽ち小蛇の所在を見失ふた、而るに一ツの大きな龍がありてほかの山で死んで居た、此の龍は即ちさきにさづをつけられた所の小蛇でありて、其の瘻は殆んど一尋ばかりの大ききず

あつたと云ふことである、おまへの所の老翁は、今私に妻はすに女を以てされんとするとのことであるが、是れ一匹の小蛇にさすを負はせるやうなものじゃ、後來一家を興すの日になつたなら、其の瘻がどうして小々ならんやと、遂に其の意見に従はなんだ、

第五課 自題肖像

新井君美

○蒼顔如鐵 鬚如銀 眼はかどだちて見へて、電光の人を射るやうに射てならぬ、紫石稜々電射人 色の石にて、目にたとへて云ふ、稜々はかどだちて見ゆるを云ふなり、○五尺小身渾是膽 全身すべて膽玉ばかりである、○明時何用書麒麟 斯くの如く

治まれる御代にあたりては、何にも麒麟閣上に自分の繪姿をかいてもらふ必要はないではないか
麒麟閣は、漢の宣帝の時に、其の功臣の繪姿を畫ける閣の名なり、

第六課 柳

秘傳花鏡

- 柔脆 もろいかて ○北土 北方の土地 ○枝條長軟 ぐくてやはらか、な ○狹長 ぐて
ながい ○柔荑 なすべ、 ○鱗次 ふうこのやうに ○細碎 ぐまかにく ○長成 ぐそだ
つ、 ○細子 たれ、こまかな ○扁小 ひらべたくてち ○白絮 わた、しろき ○柳絮 わた、やなぎの
飛舞 とんで ○叢葉 なぎのは、 ○長條 えだ、 ○瓊々下垂 さがりと居る、 ○吟蟬託
○香豔 つやがある、 ○蕩搖 ぐく、 ○嬌語之郷 なまめかしきものが ○吟蟬託
息之所 ぐかして、休息する所との心、 ○必需之木 かならずなけれ ○動搖 す、
○縦横顛倒り、さかさにしたりする、 ○飛綿わた、 ○飛絮わた、 ○暖不消あたく
かても、消滅
せぬとの心、

(10)

柳は、一名官柳と云ひ、又一名垂柳とも云ふ、本性は柔らかでも
ろい、北方の國土に最も多い、枝が長くて軟らかで、葉は青くて狭長で
ある、初春即ち一月の春には、柔らかなすべが生出し、其のさまほゞ筋
の如く、長さは一寸ばかりある、黄色な花を開らさ、黄の上、うろこ
のやうにならびて居る、そうして甚だこまかて、だんぐに葉が出てく
る、暮春即ち三月の春には、葉は長く成育して、花の中に細子を結すん
で居る、其の大きさが粟粒又は米粒位である、そうしてひらべたくてち

(11)

いさく、其の色はまつ黒じや、上には白絮をおびて絨の如くに見ゆる、俗に之れを柳絮と名づけて居る、風に随つて空に飛舞して居る、此れは即ち官柳と云ふものじや、若し葉がむらがりて木蔭を爲し、長さ枝の五六尺か、或は一丈餘もあるものに至りては、なほくとたれさがりて、其の風致は實にたもしろい、此れは垂柳と云ふのじや、別に香豔はなけれども、微風にもゆりうごさて、いつも黄鳥のなまめかしき語を弄するさとなり、又みんくと詩吟する、蟬の身をまかせて休息する所となり、人は皆取りて以て人の耳を悦ばしめ、人の目を娛しましめて、實に園林中必需の樹木となりて居る、之れを種うるときは毎年十二月に

(12)

ある、種へて後に若し動揺することがなければ、たてにさしてもよこにさしても、又さかしまに之れをさしても、盡く活さるものじや、乃ち柳は、最も生き易き樹木である、昔の人は、其の花の絮に似たるに依りて、故に飛綿飛絮も寒に入用なく、雪の如く霜の如きも、暖氣にあふて更らに消滅する色が見へぬとの吟詠もあるのであると、

(13)

第七課 柳

佐伯 樸

○旗亭楊柳緑 はみどり色てうつくしいことじや、
○影映野川流 みどり色の木がけは、ゆらりゆらりと、野川のながれにうりつて見ゆる、
○枝上多啼鳥 枝の上を見れば、啼鳥が多く羽をやすめて居るのが見へる、
○不肯

繫二驛驪一 して驛驪の如き名馬を、あへてつ
なぎとめることをせぬと見へる。

第八課 柳枝詞

劉禹錫

○煬帝行宮渭水濱 渭の煬帝の、行宮のありし所は、
今尙ほ残れるやなぎは、依然として繁茂して、春にたへぬやうに
して居る、帝の時に植へつけた柳なり、故に残柳と云へり、
○數株殘柳不勝春 五六か
日のくれあいの頃からして、大いに風が起りて来て、
其の柳の花の飛ぶことは、まるで雪のやうである、
○飛入宮牆不見人 人の花が
飛んで宮牆の内に入つたけれども、人の之れを見るものがなかつた、
是れ宮中に居る人がないので、其の花を見る人がないと心である、

第九課 鸚鵡

清國國文教科書

○林果この中の、
○嚼碎だく、
○其仁、
○尖曲がり居る、
○分開らく、
○骨節靈活 はたらきをして居るを云ふ、
○樹巔 木のいたい、
○清池 水のきよ、
○澡
あら、
○週身之羽のはれ、
○樹枝だ、木のえ、
○軟腐之木 やはらかくて、
○全群之卵
全体にむらされる、多くの鸚鵡の卵を云ふ、

鸚鵡と云ふ鳥は、よく物言ふ鳥である、熱帯地に産するもので、
木蔭を擇らして居る、それから林中のこのみを食べつて生きて居る、尤も
野櫻桃の實を嗜み、常に其の核をかみくだきて、其の核の中の仁を取り
て食ふのじや、

其のくちくちは、極めて鋭利で、尖りまがりて鉤のやうになりて居る、

そうして爪は又のやうで、爪を以て物を握るに、殆んど人の手に似て居る、趾は一ツ／＼分開して人の指のやうである、骨も節もふしぎなはたらきをして、恒にそれを用ゐて樹に登るが、其の樹に登るときは、先づ啄を以て樹枝につりかけ、更らに爪を以て仰ぎて之れに攀ち、たがいに升りて、以て樹木のいたゞきに至るのである、

性質は水に浴することを好み、たま／＼飛んで水の清き池や、流れの長き河に近かつけば、輒ち首を探りて水に入り、其のからだ中の羽を洗濯し、水浴既におはれば、日中について之れをさらして居る、

鸚鵡は、未だ嘗つて巢を營なんだことはない、夜は樹木の穴の中に宿り、

若し穴がせまくて容るゝこと能はざるときは、爪を以てさかさに樹の枝にひつかけ之れにぶらりとさかさにかゝりて、一夜を過すのである、卵をそだつるにも、亦穴の中に在りて、常にやはらかに腐つて居る木を以て、薦として居る、其の全群の鸚鵡の卵が、皆一ツ穴の中に集つてしまふのである、

第拾課 西京名勝

菊地 純

- 靈域を云ふ
- 祠宇をまつれ
- 壯嚴派じや
- 境域かい内
- 舉行おこ
- 例祭祭禮
- 扮装へる
- 壯觀みもの
- 古來と云ふ心
- 噴々やす

○遐邇かじに同じ、云ふ ○造營ぞうえいける、○結構けつこう宏大かうたい、かまへ方が、おほ
 ○大吉たいこく利まるてら、○懸崖けんがいるやうながけ、居 ○天地てんち豁然くわつぜんひらけて居る、○河之
 金剛こんがう河内かふちの國の ○髣髴ほうふつ間のつまびらかならざる貌、見聞 ○淡之たん諸山しよざん、○糝糊もろこ
 中ちゆうちを云ふ、○飛泉ひせん云ふ、○崖壁がいへきうながけ、○水晶すいしゆう簾れんだれのやうじや、○
 勝中じやうちゆう勝しやうと云ふ心、○東端とうたんはづれ、○半腹はんぶくほど、○浴槽よくそうれ、○澄澈ちやうてつみ
 てすきと ○眼界がんがい遐邇せうゑるく、と見ゆる、○闕都くわつと之景けいけしき、○雙眸さうぼう中ちゆうのひと
 ち、○指願しちの間まと云ふ心、○眺矚てうそく之佳かとはと云ふ心、○一いち大活圖たいくわつと大きな
 きて居る地圖 ○眞美しんびしさと云ふ心、

京都けいとうの地ちには、靈域れいえきがおほくある、其その中ちゆうで最もつとも世間せけんに鳴りひび

て居るものは、祇園ぎえんと清水しみずの二ツが是れじや、祇園ぎえんの社やしろは、東山ひがしやまの麓ふもとに
 ある、世間せけんでは之れを八阪神社やっぱんじんじやと稱して居る、祠宇しじゆうが壯嚴さうげんで、境域けいやく内ないが
 甚だ廣大じんたうたいじや、そうして附屬ふそくの小祠せうしが二十餘じゆう宇うある、毎年まいねん七月しちがつに、例祭れいさい
 を舉行きやうかうするが、之れを祇園會ぎえんかいと云ふて居る、其の時ときには山車たしがひき出さ
 れ、互たがいに美びを競きこひ華くわを鬨たかはせて、其の壯觀さうくわんなること人ひとをして喫驚けつけいさせ
 るばかりじや、清水寺しみずでらは、之れを音羽山ねとばやまと稱し、清水坂しみずざかの東ひがしにある、古
 來こらい之れを以て洛東第一らくとうだいいちの靈場れいじやうとなして居る、そうして其の名なは嘖々しやくしやくと言
 ひはやされて、遠近えんきんにやかましく傳つたはつて居る、嘗かつて其の縁起えんきを案あんじて
 見たが、僧延鎮そうえんちんと云ふものの開基かいきにかゝり、阪上田村磨さかひらたむらが、堂宇たううを造營ぞうえい

して居る、其の結構の宏大なること、其の建築の雄偉なること、實に古今に希れなるもので、今を去ること一千有餘年來の一大古刹である、本堂は懸崖に齎りかゝりて之れを架設し、前には舞臺を設け、其の高さは五六あゆる、臺に上りてひとみを放つて見れば、天地は豁然とひらけ、河内の金剛山は、之れを髣髴の間に認め得るし、淡路島の山々は、之れを糝糊の中に望み見ることが出来る、其の高きことは知らるゝてあらう、一ツのたきがありて、崖壁にかゝりて居る、謂ゆる音羽の瀧は是れじや水は多くないけれども、水晶のすだれをかけたやうで、其の觀た所は頗ぶる奇である、凡そ洛水即ち鴨川の内外には、名勝の地の多きことは、

枚舉にいとまあらざる程であるが、其の名勝中の名勝をあぐるときは、圓山がそれである、境界は八阪神社に接して、其の東方の端にある、明治の初年に地をほりて一ツの鑛泉を得た、因りて三層樓を東山の半腹に建築し、内に浴槽を設け、外に泉石をたゝみ、稱して圓山の溫泉と曰ふ鑛泉は頗ぶる清澄で、すきとほりて居る、よろしく一浴をこゝろむべきである、樓に登りて一望すれば、眼力の及ぶ所、はるくとしてからに京都全部の光景は、ふたつのひとみの中にあつまり、西南の山々は、指願の間に落ちてしまふ、四方のながめのよきことは、此の土地にすぐるものはない、是れ其の名の、遠近にさはがしき所以であらう、洛即ち

京都に遊ぶものは、徒らに脚を勞せずして、先づ第一番さまに圓山に至りて、一望の土地をかりて一望すれば、幾多の名勝風景は、招かずしてひとりであつまりてくる、一大活圖をひらきて、之れを見るに異ならぬ、東山山水の眞美景は、圓山に於いてこれを観ることが出来る。

第拾壹課 富士山練習用につき、解釋を附せず、

第拾貳課 織田公營皇居大槻清崇

○足利氏之季足利尊氏後醍醐帝中興の業を奪ひ、頼朝の轍に替ひ、征夷大將軍となりて、之れを十三代に傳へたり、季と云ふは、義昭將軍たりし頃を云ふ。 ○宮闕之頽廢天子の御所の、やぶれすたれたるを云ふ。 ○茨牆竹柵竹にてつくれる柵、矢來に、 ○門關門もとび

云ふ ○階下のもと ○搏土塊つちくれをまるめ ○闌ひつそりとし ○窮阨せまきまり 意にて困究にせまるを云ふ ○盤板煤蝕三寶盤の板が、すけてくる ○深黒こまつくろし ○盛夏せいげつ て、暑氣のさかん ○禪衣ひとへ ○蚊帳かや ○瑣尾さび ○辨べん ○供御くご 天子あしがりものをさしあげしを云ふ ○舉あぐ ○廢典てんをすたれたる典證 ○煥然くわんぜん

足利氏の季州に當りては、宮闕の頽廢せること、實に其の極に達した、當時の、古老の言を言ひ傳ふるものがあつて云ふ、當時の御所には、茨の牆と竹の矢來のみありて、復た門關と云ふものがなく、多くの童兒等は日に、階下に集まり來り、土塊をまるめて團子となし、之れを打ちあいてたはむれとして居た、時に簾をかゝげて戸内を窺へば、

闐然として住む人のないやうであつた、而して公卿方の困究急阨は取り別けて甚だしく、近衛公の國歌會に、饑團を三寶盤に盛りて、來客に供したが、三寶盤の板はすくけて、且つむしが喰ひ、まつくるなことに漆て塗つたやうであつた、人がありて常磐井公に謁見した、時方に盛夏であるのに、公にひとへものと云ふものがなかつた、そこで直ちに蚊帳をからだにまきつけ、以て其の人に面會された、其の微弊せること此のやうであつた、所が織田公信長の起りて、京畿を裁するに及ぶや、急に宮禁を營作し、天子の供御を十分にさしあげ、是れまで廢れ居し典禮を舉行し、平常の職務をば繼承させて、一日も投げやりにされるやうなことは

ない、そうしてから後、すべてのものが煥然とあざやかになつて、始めて觀るべきものがあるやうになつたと云ふことじや、

第拾三課

湊川之戰 其一

賴

襄

- 大擧あげての意、○東犯侵犯する、○震動ごく、○擧ニ九國一而來て來たとの心、
- 疲兵てた兵士、○格闘いあふ、○奇道な兵道、○糧道のみち、○衆盛かんじや、
- 有ニ天命一ありとのこころ、○抗議議論する、

延元元年の三月に、足利尊氏は大いに九州の兵をあげて、東上して京師を犯し奉らんとし、水陸兩道から兵を進めてきた、義貞は兵庫に

いくさ立ちし、書を飛ばして危急を告げた、朝廷は之れがために震い動いた、時に鎮守府將軍北畠顯家は、己に鎮守府にかへり、京師は至りて兵士が少ない、帝は正成に命じ、速かに行いて義貞を援けしめた、正成對べて曰ふ、尊氏は新たに九國の兵をあげて、攻めて來たのであるから、其のほこさが甚だするとい、而るに我疲勞さはまる兵士を以て、之れと格闘してからに、他に奇道の敵を破ぶるに足るものがなかつたならば、其の失敗せんこと必然である、今日の計を爲すには、陛下は復た叡山に行幸され、義貞をば召しかへされ、賊軍をゆるして京師に入らしめ、而して臣は河内にかへり、其の糧食運搬の道を絶ち切らば、賊兵は日

にく散亂し、我が兵は日にく聚まり來るであらう、是に於いて前後から夾みて之れを攻めば、一戦して破ぶることが出来る、義貞の計略も、蓋し亦此に出づるであらう、たゞ、人の言語如何と、顧慮せねばならぬ、戰鬪の道は一樣ではない、其の肝要とする所は、勝利に歸すればよいのである、願くは朝廷にて、再び之れを熟計せよと述べられた、もろくの公卿方は、皆正成の言に賛同されたが、ひとり參議藤原清忠は之れを不可として曰ふ、賊軍は如何に衆盛じやと云ふても、前役の如きに過ぎぬのであらう、天皇の軍隊には、天命がありて助くる所あるものじや、だからよろしく之れを京師以外の地に防ぐべきであると、帝は遂に清忠

の言に従はれた、正成は退きて其子弟に謂つて曰ふ、事既に此の極に至りては、何にも必らず抗議する必要はないと、余思ふに、正成の必死を決せしは、王師有天命の五字に因りて、あらうと、何故となれば、王師に天命ありて、戦争に負けぬものとすれば、正成等の勳功なるものは、少しも認められて居ぬからである、斯くの如き心を以て將士を遇せば、誰れか一命を捨て、戦ふものあらんや、好しや必死の覺悟を極めて賊軍を追ひ退けても、王師に天命あるから勝つたのじやと言へば、將士の勳功は一ツもなくなるのである、故に正成は一命を捨て、天子の値遇に答へたのじや、そうして清忠等の愚物をして、王

師も將士の力に由らざれば、勝たれぬものじやと云ふことを、悟らしめたのである、

第十四課 湊川之戰 其二 賴 襄

○記ニ吾言一心記せよと送り假名せしは、誤記ならんか、○安危所レ決 急に逼まるか、決着する所、○計ニ較禍福一はかりくらべての意、○嚮レ利忘レ義 義理を忘れてしまふの意、足利氏に降服して、王、○乃父之忠義をと云ふ心、○族隸僕隸、○舊址るあと、○訣別するをふ、○起 發足させる、

五月十六日に、正成は弟正季、子正行等と、宮闕を辭して西行

し、櫻井の驛に到着した、正行時に年十一であつた、正成は之れを故郷河内の國に遣りかへし、且つ之れを戒めて曰ふ、おまへは幼少なりと言へど、己に十歳を過ぎて居るから、猶ほよく吾が言葉を起臆して居るであらう、今日の戦争は、實に天下の安危の決定する所である、意ふに吾は復たおまへを見る事が出来ぬであらう、おまへは吾已に戦死せりと聞かば、天下の人々は盡く足利氏に歸服するものと、知りて居らねばならぬ、去ればとて慎しみて、災禍と幸福をはかりくらべて、利益のある方に向ひ、忠義をば忘れてからにおまへの父の忠義を廢棄してはならぬ、我が一族僕隸をして、一人でも生存するものがあらしめたならば、之れ

を率ゐて金剛山のしろあとを守り、身を以て國に殉ひ、死する一ツがありて、他の道はないものとあきらめねばならぬ、おまへの我にむくゆる所以のものは、此れより大なるものはないぞと、因りて帝の嘗て賜ひし所の寶刀を以て之れに授け、以て訣別の意を表した、正行は従ひ行きて共に與に戦死せんと請ふたが、正成は之れを叱して發足せしめられた、正行は涙を揮ひて立ち去つた、

第拾五課

湊川之戰 其三

頼

襄

○懇勉とめさせ、○訣飲きをとりかはす、○拔軍 循之 水軍の先鋒の、上陸するを拒がんとて、軍隊を拔

きて其のあとに、**○腹背まへうしろ**を云ふ、**○突入**いる、**○七離七遭**なしたびはなれて、
從ひ行くを云ふ、**○逸之**めたと云ふ心、**○血戰**たゝかふ、**○民舎**
○一敵將ふ、**○藥師寺次郎左衛門**と云、**○綱刺**死するを云ふ、
百姓家、**○欣然**ぶ貌、**○綱刺**死するを云ふ、

義貞 正成はそくて兵庫に至り、義貞にあって之れを慰め勉めしめ、義貞と訣飲すること終夜に及んだ、是の時に當り、尊氏は水軍に大將となり、直義は陸軍に大將となり、共に東上して來た、そうして陸軍は五十萬人と稱して居る、正成は手兵七百人を率ゐ、湊川に陣して之れに當りた、義貞は三萬騎を以て、和田崎に陣して水軍を拵いだ、而るに水軍の先鋒は、和田崎を通り過ぎて東進した、義貞は之れを拒がんとして、軍

隊を抜きて其のあとに従ふて進んだ、そうして尊氏の全軍は、誰れも拒ぐものがないから、已に安すくと和田崎に上陸してしまつた、正成は顧みて正季に謂つて曰ふ、我は前にも背にも敵軍を受けて居る、迎も遣れ去ることは出来ぬ、先づ前のものを打ち破りて、而る後背のものと接戦しやうと思ふ、如何にと、正季曰ふ、然り、其の如くして可ならんと、是に於いて兄弟は相ならびて、陸軍の五十萬に突き入り、七たび離れて七たび遭ひ、是非共直義を獲て止まんとした、直義は馬さずつきて馬より墜ちた、我が兵は及ぶになんくとしたが、たまくと一人の敵將があつて、我が兵を遮ぎり闘ふて逸し去らしめた、尊氏も亦兵を分けて來て

援け、我が軍のうしみを包んだ、正成兄弟は、馬をひきかへして之れに當り、血を流して戦ふこと十六合、盡く其騎のを亡ふて、餘す所たゞ七十三騎となつた、其れでも猶ほ圍みを破ぶりて、逸し去るには十分であるが、正成は心に生きること欲せぬ、そこで走りて湊川の北方の百姓家に入り、坐して鎧をさきて見れば、からだに十一創を被りて居た、顧みて正季に謂つて曰ふ、死んだなら何をしやうと思ふかと、正季曰ふ、願くは七たびも人間に生れ出で、以て此の國賊を殺しつくさんと、正成欣然として曰ふ、是れ吾が心を獲たりと、共にさしちがいて死んだ、正成は年四十三で、宗族は十六人、従士は五十餘人、悉く之れと共に割

腹して死んだ、

第拾六課

題ニ楠公訣子圖

頼

襄

○海甸 陰風草木腥 海内千里のうちを吹きまくる陰風は、草木までもなまぐさくしてしまつた、海甸は、畿甸の地を云ひ、陰風は、陰氣くさき風を云ふ、
○史編特筆姓名 馨 史の編輯に特筆大書されて、其の姓名は實にかんばしくなつた、
○一腔熱血存ニ餘瀝 一かばかりのこしておいて、餘瀝は、あまりのしづくとも云ふ心、
○分ニ與 兒曹一灑ニ賊庭 足利氏の庭内にそゝぎかけしめたのである、

第十七課

韓信

十八史略

○漂母ひょうぼは洗滌せんじやくはは飯いはせしめしをく、○哀王あいうわう孫そんなり、我が邦にて、若様と云ふに同じ、哀は、可哀相じやと云ふ心、○屠中少年とちゆうのせうねんや、しき少年を云ふ、○衆辱しゆうじやくつかしめる、○中情怯耳ちゆうじゆうはきよなるのこころは、おくびよう、○胯下こかした、○蒲伏ぼふくへする、○干かもとむる所あるを干と云ふ、○謠歌あうかうたに思ふ所をう、○丞相じゆうしやう臣しんに今日けふの總理大こくし、○國士無雙こくしむそふものなしと云ふ心、○無所事なれごと信しんを韓信を用ゆることを、仕事しごと、○鬱々うらく同じ所に鬱屈して居るを云ふ、○慢無禮まんれいにしてなしい暴慢と云ふ心、○具禮ぐれい備する、○部署ぶしよする、○故道こたうるきみち、

○淮陰わいゐんの韓信かんしんは、其の家甚だ貧しくして、ある城下じやうかで釣りして居た、すると一人の洗濯婆せんたくばあがありて、韓信の飢餓きがに逼れるを見、韓信に飯を食はせた、信は謝して曰ふ、吾他日わがな志じつこころを得たならば、必らず厚く母に報

ゆる所ところあらんと、漂母ひょうぼ怒りて曰ふ、大丈夫と生れながら、自から食すること能はずとは、何んたる不甲斐ふがひなきことであるぞ、吾はたゞ王孫わうそんの身をあはれに思ひ、一飯を進めたのである、豈に報酬ほうじゆうを望むがために、食を進めしものならんやと、淮陰わいゐんの屠中の少年に、韓信を侮蔑するものあり、因りて衆中しゆうちゆうで之れをばづかしめて曰ふ、汝は、からだか長大ちやうだいにして、好んで劍を帯びて居るけれども、心のうちは臆病おくびやうであらう、若しよく死ぬることが出来るならば、我を刺し殺せ、若し刺すことが出来ぬならば、我がまたぐらを出て、直ぐに立ち去れと、韓信は無言で其の顔をよく視て居たが、何んとも言はずに、俛して其の少年の胯下こかをくぐりて腹ば

へした、一市中の之れを見た人々は、皆信の怯懦なるを笑はぬものはなかつた、項梁の淮水を渡るとき、信は之れに従つて往つた、又しばく策略を献じて、項羽を干したけれども、用ゐてくれなんだ、そこで楚を逃げて漢王に歸伏し、治粟都尉と云ふものになつた、そうしてしばく漢の丞相蕭何と語り合ふた、蕭何は信の人となりを奇として居た、漢王は南鄭と云ふ所に至りた、將士は皆謳歌して心中を述べ、歸國せんことを思はぬものはなかつた、そうして多く道から亡げて歸國するのだ、韓信は自から度りて見るに、蕭何は已にしばく信のために言ふたのに、王は之れを用ゐぬのであると、即ち亡げ去りた、蕭何は韓信の逃げ去り

て、他人の用を爲すを恐れ、自から之れを追つかけた、或る人が王に申して曰ふ、丞相何亡ぐと、王は大いに忿怒して、左右の手でも失へる程に見へた、所が蕭何は歸へり來て謁見した、王罵りて曰ふ、汝の逃亡せるは何んのためぞと、何曰ふ、逃亡せるにあらず、韓信のあとを追いかけたのじやと、王曰ふ、諸將の逃亡するもの、十を以て數ゆる程であるのに、公は追ひかけたことはない、韓信を追ふとは詐はりてあらうと、何曰ふ、諸將は實に得易き人々である、韓信は國士無雙である、王必らず長く漢中に王たらんと欲せらるれば、固より信を用ゆることを仕事とすることはない、若し必らず天下を争はんとせらるゝならば、信を用ゆ

るにあらざれば、與に事を計るべきものはないと、王曰ふ、吾も亦東せんと欲するのじや、どうして鬱々として、久しくこゝに居らるべきと、何曰ふ、必らず東せんと欲せば、よく信を用ゐよ、信は即ち留まり仕へん、左もなければ、信は終に逃亡するであらうと、王曰ふ、吾公のため、信を以て將となさんと、何曰ふ、留まり仕へぬであらうと、王曰ふ、以て大將となさんと、何曰ふ、幸甚である、されど王は素より傲慢で、禮節と云ふものはない、大將を拜命するのに、小兒を呼ぶやうである、此れ信の去る所以であると、乃ち壇場を設け、大將を拜するの禮を具へた、諸將は皆喜んで、誰も彼も大將を得るであらうと思ふた、拜する時

(40)

に及んで之れを見たら、韓信でありた、一軍皆驚かぬものはなかつた、王は遂に韓信の計略を用ゐ、諸將を手わけして其の向ふ所を定め、蕭何を留めて巴蜀の租税を収めしめ、以て軍隊の糧食を支給させた、韓信は兵を引きさて故道より出て、雍王章邯を襲ふて其の不意を攻め、章邯は遂に敗死した、塞王司馬欣、翟王董翳は皆降参した、

(41)

第十八課 岳飛 其一

清國國文教科書

○氣節きせつ節操せつそう、○沈厚ちんこう深沈しんしんにして温厚おんこう、○寡言くわげん言語げんごがす
○神力しんりき神かみの如ごとき、○多半たはん淪陷りんけんも沈淪しんりん陥落かくらくすると云ふ意いにて土地ちど、○慨然がいぜんなげきか
○荼毒たどく茶ちは毒どくなり、毒どくを吞のむ、○外人がいじん之情のじやう

外國人と云ふ心にて、金人の心情がと、○外族 清人以外の、○憑陵 是たらく、○估據 してこもる、○降兵 降伏し、○叛將 したる將士、○恢復 大いにものや、○殊恩 別段な、○遠戍 遠く邊境を行くものど、○問勞 いたはる、○頽犒 勞をねぎらいて、○秋毫 心獸類の毛は秋に至れば其のさき鋭くな、○感激 奮激する、○一縷 ひと、○露宿 野宿する、○歸心 心をよる故に云ふ、

譯註 岳飛は、相州湯陰と云ふ所の人である、年少の時から氣節を負ひ、沈厚で寡言で、神の如き力がありて、善く強弓をひいて、よく左右兩方に射た、時に宋は金人のために逼られ、中原の土地は、半分以上も淪陥して、金の所有となつた、金人は、宋の降人劉豫を立て、帝として中國に主たらしめた、岳飛は慨然として曰ふ、金人の此の舉は、中原に茶

毒して以て、中國の人を以て中國の人を攻めさせんとするのであると、嗚呼岳飛の此の論は、深く外國人たる金人の、心情を見得たりと云ふべきである、夫れ中國の土地大に、人民衆きを以て云へば、苟くも人々よく死を致して國のために盡くせば決して清國人以外の族人共をして、憑陵せしめぬやうにすることが出来る、而して彼金人の吾が土地を佔有し、據有する所以のものは、實に吾が降參せし兵卒、背叛せし將士の力を利用するためである、

宋の高宗は、既に岳飛に命じて大將となした、岳飛は中原を恢復して、宋室をもとの如くにするを以て己の責任として居た、そこで士卒を撫す

るに特別なる恩恵を以てし、士卒に疾があれば、みづから爲めに調薬して與へ、諸將の遠く邊境をまもるものあれば、妻を遣りて其の家族を訪問慰勞し、王事に死するものあれば、之れを哭して其の遺孤を育て、やる、凡そ其の勞をねぎらいて、飲食物を將士にわかつことあれば、均しく軍吏までに給與して、秋毫も私すると云ふことはない、故に將士は其の殊遇に感激して、人々死を致さんことを望んで居る、又士卒をおさへつけて、人民を侵犯せしめぬ、卒に人民の麻一縷を取りて、馬草をたばねたものがあつた、すると岳飛は立ちどころに其の卒を斬り棄て、軍中に徇へさせた、だから卒共が夜分野宿する時、人民が門を開いて内

に納らんことを願ふも、敢へて内に入るものはない、故を以て遠近のもの共皆心を歸して、岳飛のために用を爲さんことを望んで居る、即ち己に金に降伏したのも、或は堡壘をかたく守りて、以て飛の至るを待ち、或は衆を率ゐて來歸するものもある、金人は是れがために、其の恃む所を失ひて、號令が少しも行はれぬやうになつた、

第十九課 岳飛 其二

清國國文教科書

- 力戰たつとめて
- 死傷枕藉に枕しあいて居るを云ふ
- 所在つての意
- 歸附
- 痛飲をのむ
- 北伐征伐する
- 權臣語にては、きれものと云ふ
- 痛

哭いたみ、○悲泣みなく、○冤のつみ、○無己と云ふ心

岳飛は既に深く人心を得て、戦ふごとに士卒は皆奮激力戦してか
らに、死傷するもの相枕藉するが如さに至るも、少しも動揺することは
ない、敵人は之れがために語りて曰ふ、山をゆりうごかすことは容易じ
やが、岳家の軍をゆりうごかすことは至難ごやと、岳飛は金人と、大小
數十戦したが、戦つて克たぬことはなかつた、嘗て五六百騎を以て敵の
十萬衆を破りたことがある、金軍は所在岳飛の至れることをさけば、輒
ち恐れて逃げ去るのじや、宋の降將の金のために働いて居たものは、相
つぎて歸附するやうになつた、岳飛は大いに喜び、其の部下のものに言

つて曰ふ、此れより直ちに黄龍府に抵りて、諸君と同所で痛飲するばか
りじやと、黄龍府は金の東京である、

岳飛は戦勝の威力に乗じ、將さに黄河を渡りて北の方金を伐たんとした、
而るに宋の權臣の秦檜と云ふものは、金によりかゝりて自から重しとし
て居る國賊である、だから力めて和議を主としてからに、岳飛を召して
國都に還さんことを乞ふた、飛は召還せらるゝ詔を得て、歎息して曰
ふ、十年の間力をつくして取りたものを、乃ち一旦にして廢棄してし
まふのであるかと、兵を引きて歸りてきた、人民は飛の馬をさへざり、
痛哭して之れを留むるのじや、飛も亦悲泣して、其の不幸を歎かれた、

されど朝命にせき立てられ、遂に王師をかへしたのであるが、力戦して得た所の土地も亦、盡く失ふてしまつた、秦檜は其の徒黨の、張俊、萬俟卨と共に、岳飛の謀叛と云ふことを誣ひ、之れを獄に下した、そうして潜かに獄吏に命じて、飛を殺させた、宋の孝宗の位に即くに及び、飛の冤に仆れしことを知られ、飛を封じて鄂王とされ、おくり名して武穆と言はれた、そうして改めて浙江西湖の旁らに葬られた、士民は中原の回復せざりしことを憤り、飛の死を痛んで止む時なく、乃ち鐵にて秦檜夫婦并びに、張俊、萬俟卨の像を鑄て、岳飛の墓前に跪まづかしめ、僅かに其の鬱憤を晴らしたと云ふが、今日に至りても猶ほ存在して居る、

第二十課

伊達正宗

練習用のものにつき
き解題を附せず

第二十一課

爲學之要

杜 亞 泉

○年壽は壽命の壽なり、○學問無窮窮むる程、益々深さを増すのみで、其の窮極する所がないやうであるから、○切要ものとの心、○至寶きたから、○衰弱よはる、○無三意興味もなしと云ふ心、○壽命ちの、○短促ちいまる、○至苦きくるしみ、○處世之方の中に於て、人と人との、○謀生之學の學問を云ふ、○此四學者むるの學、身を修を四學と稱せるあり、

【訓】 學問と云ふものは、こゝが底じやと云ふ所のないものじや、而るに人間の年にも壽命にも、限りがあるからして勢ひ盡く天下有用の學問を、學んでしまよ云ふことは出來ぬ、だから必らず其の尤も人世に必用なるものを擇らんで、之れを學ばなくてはならぬ、身體は人間の此の上なきたからものじや、之れを保護することを知らねば、やまひにかゝりて衰弱し、作事俱に意志も興味もなくなる、そうして壽命も必らず短促してしまふものじや、此れ天下の此の上なき苦痛である、だから人は當さに身體を養成するの學問を知らなくてはならぬ、身體が強壯でありても、人間たるの道と、世に處するの方を知らぬときは、禽獸と何に

も異なつた所がなくなる、だから人は當さに、身を修むるの學問を知らなくてはならぬ、人は既に世に生れ出た上は、即ち一ツの藝術を習ひ覺へて、生計を營むの法とせねばならぬ、書をよみ、文字を識り、算を習ふのわざよりして、天文、地理、格致、化學に至るまで、人として學ぶべからざるものはない、然る後以て士ともなるべく、農ともなるべく、工ともなるべく、商ともなるべきである、其の藝は異なるけれども、總べて之れを生を謀るの學問と云ふ、既に一國の民たる上は當さに民たるの責めを知らなくてはならぬ、則ち歴代の史記も、國家の政法も、其の大略を知らなくてはならぬ、是れを民たるの學問と云ふのじや、此の四

ツの學問は、一ツを缺いてもよろしくない、其餘の學問は、人の自か
ら擇ぶにまかせるばかりである、

第二十二課 三餘

陳

壽

○訥訥辯を云ふ、○負販（物をおふて）ありあるく、○挾持（わきはさ）みもつ、○習讀（しうどく）よむ、○苦渴（くかつ）渴望する、○
歲之餘（さいのあま）は其のあまりの休息すべき時なりとの止、○日之餘（ひのあま）いたあとしてあるから、餘分
な時で、休息すべき、○陰雨者時之餘（いんうけとりのあま）は、平生はたらいた日のあ、
時間であると云ふ心、○陰雨者時之餘（いんうけとりのあま）は、平生はたらいた日のあ、餘分

魏の董道と云ふ人は、性質訥辯だけれども、學問を甚だ好んで居
る人であつた、兄の季中と云ふ人と、耜（し）を采りて働らさ、又物を負ふて

販賣してあるく時も、常に經書を挾持してがらに、ひまさへあれば、習
ふたり讀んだりして居た、明帝の時に、其の官大司農に至りた、初め遇
は老子訓註を作りた、又善く左氏傳をよんだ、人がありて、遇に従ひて
學ばんとすれば、遇はあへて教ゆることをせずして云ふ、必らず當さに
先づよむこと、一百遍すべきである、是れ讀書百遍すれば、其の義が
自から見はるるものじやと云ふことを言ふたのである、從學者云ふ、學
びたくも、日のなきことに苦しみ、其の日を得んことを渴望すと、遇言
ふ、當さに三餘を以て學ぶべきであると、三餘とは、冬は歲のあまりで
ある、夜は日のあまりである、陰雨の時は、時の餘りであるとの心である、

第二十三課

夏禹

姚 祖 義

○受^うレ^る誅^{ちゆう}を罪^{つみ}ありて殺^{ころ}さるゝ、○焦^こ心^{しん} 勞^{ろう}形^{けい} は、苦心^{くしん}するを云ひ、勞形^{ろうけい}は、身體^{しんたい}に難儀^{なんぎ}さするを云ふ、○水患^{すいこん} 洪水^{こうすい}の心^{しん}痛^{いた}、○九鼎^{きゅうてい}なへを云ふ、○王者^{わうじやう}傳^{でん}統^{とう}之^の重器^{じゆうき}傳^{でん}ふる時の、唯一^{ぐわいいつ}の證據^{ていこ}とすべき重器^{じゆうき}と心^{しん}、○討滅^{たうめつ}るほす、

大禹^{たいう}は、堯舜^{けうじゆん}に繼^つげる大聖人^{だいせいじん}であるが、鯀^{こん}と云ふ人の子^こである、鯀^{こん}は帝命^{ていめい}を受け、洪水^{こうすい}を治^{おさ}めて功^{こう}なかりしたため、誅^{ちゆう}を受けて其^その身^みをほろぼした、禹^うは深く之^これをかなしみ、帝舜^{ていじゆん}の命^{めい}を受けて、洪水^{こうすい}を治^{おさ}むるに及^{およ}び、心^{しん}を焦^こし形^{けい}を勞^{ろう}し、外^{そと}に在^あること十三年^{じゅうさんねん}に及^{およ}んだが、三度^{さんたび}も其^そ

の家門^{かもん}を過^すぎたけれども、敢^あへて門内^{もんない}に入^いつたことはない、蓋^けし急^{きゆう}に洪水^{こうすい}の心配^{しんぱい}をなくして、父^{ちち}の過失^{くわしつ}を掩^{おほ}はんとした爲^{ため}めである、洪水^{こうすい}の心配^{しんぱい}も既^{すで}に止息^{しそく}してしまつた、舜^{しゆて}は其^その功^{こう}を嘉^よみし、禹^うに禪^{せん}つるに帝位^{ていゐ}を以^{もつ}てし、國^{くに}を夏^かと號^{ごう}した、禹^うは九州^{きゅうしゆう}から金^{きん}をよせ集^{あつ}め、九ツの鼎^{かたべ}を鑄^いて、それを以^{もつ}て王者^{わうじやう}統^{とう}を傳^{でん}ふる時の重器^{じゆうき}とした、禹^うの崩^{やう}ずるに及^{およ}んで、其^その子^この啓^{けい}と云ふ人も亦^{また}賢者^{けんじや}であつた、諸侯^{しよこう}は禹^うの徳^{とく}をちもい出^だし、啓^{けい}を迎^{むか}へて之^これを立て、國王^{こくわう}とした、たゞ有扈氏^{いうこし}は啓^{けい}に服^{ふく}せぬため、啓^{けい}は乃^{すなは}ち兵力^{へいりき}を用^{もち}ゐて之^これを討滅^{たうめつ}してしまつた、

第二十四課 髮匪之亂

姚祖義

○兩廣 二省を云ふ、○凶歲 五穀のみのうらみ、○逆謀 はかる、○附會 たがふ、○煽惑 だてまど、○洪逆 洪秀全と云ふ逆、○兩湖 湖南湖北、○僞都 みよの、○分擾 ださせる、○老朽 ちがはてる、○蹂躪 じりりんふみに、○震動 うごく、○恢復 元のとりにかへして、○上游 上流と同じ、○勇悍 くはげし、○相持 ちかひあふて、もち、○盪平 いらかにする、○屠殺 こるす、○克復 かつてと、○漸次 だだだんと、○巢穴 か、○餘黨 なかま、○擁立 たつて、○蔓延 ふへる、

清の宣宗の、道光の未年に、廣東廣西の二省、連年凶歲にあい

て五穀みのらず、所在盜賊起りて民擾亂した、粵人に洪秀全と云ふものがあつた、素より叛逆を起すの企てがあつた、そこで基督教に附會して、愚民共をおだてまどわした、楊秀清、石達開等皆之れに附屬し、遂に亂を廣西に作した、そうして國を太平天國と號し、其の徒は皆髮を蓄へて居る、故に長髮賊の名が出来た、官軍は之れを討伐したけれども、しばしば失敗するのみであつた、たまに文宗が新たに立ちて天子となられた、洪逆はそこで湖南湖北の二省に由り、東の方江寧をおとしいれて、それに據りて僞都となした、且つ其の仲間を遣り、手を分けて各省を紛擾せしめたが、極めて無紀律でありた、時に各省の綠營とて、清國舊來

の常備軍は、皆老朽してしまつて、用に堪へるものは一人もない、故に賊軍の勢力はますますさかんになり、江南の土地は、總べてふみにじられて、殆んど彼等の爪牙にかゝらぬ所はなくなつた、更らにほこさきを江北の地に向けたので、全國は震動した、そこで天下に詔して、王事に勤めさせた、侍郎曾國藩と云ふもの、始めて湘郷につきて、兵を起して賊を討じた、ついで胡林翼と云ふもの、武昌を恢復して、以て長江の上流を扼した、是に於いて湘淮の間の人々は、皆其の風をさいて起きあがり、賊徒を滅さんことを思ふやうになつた、

曾國藩の湘軍を創立してより、江水に沿ひて東下し、しばく各城をと

りかへした、されば賊會李秀成、陳玉成等は、皆勇悍にして善く戦ふので、相待すること五六年に及んで、未だ盪平することが出来なんだ、已にして賊中に自から相屠殺するさはぎが起つた、官軍は之れにつけ入り、たゞかい克つて安慶を取りかへした、それから進んで偽都を取りかへさんことを圖つた、各省の賊共は、復た左宗棠、李鴻章等の漸次討滅する所となり、賊の勢力も益々傾いてきた、同治三年に、曾國藩は曾國荃、彭玉麟等の諸軍を督し、水陸から并び進み、直ちに偽都に逼つた、諸賊徒は、偽都は賊の巢穴の在る所なるを以つて大部隊を引率して來り援ふた、官軍は大いに之れを破り、遂に金陵に克つた、賊黨五六十萬人は、

皆衆をあつめて自から焚死し、一人の降るものもなかつた、時に洪秀全は、事の成らざることを察し、己に先づ毒薬を仰いで死んでしまつた、餘黨は復た其の子を擁立して王としたが、是に至りて遁れ去つた、されど又之れを奪ひ返へした、洪逆の亂を唱へしより、蔓延すること十三省に至り、凡そ十六年にして始めて消滅してしまつた、

第二十五課 兵役

○適齡壯丁 齡に於ては満二十歳を云ふ、兵役に服する年
○溢餘あまる、○取ニ其習一也 ことになれて居るを以て、採りて水兵とすると云ふ心。

日本の制度にては、男子は年齡十七より、四十に至るまでは、皆兵役に服すると云ふ義務がある、兵役は分けて常備兵役、後備兵役、補充兵役、國民兵役の四種としてある、そうして常備兵役は、再び分けて現役及び、豫備役としてある、現役は、陸軍は三年で、海軍は四年じや、して男子生れて二十歳に達すれば、之れに服役することとなりて居る、現役が既に終はれば、既に豫備役に服する、其の年限は、陸軍は四年四ヶ月で、海軍は三年である、後備兵役は、五年を以て期限としてある、常備兵役を終はるもの、之れに服するのだ、補充兵役は、毎年徴集する所の適齡壯丁の、其の年の定額にあふるゝときは、此のあふれてあまれ

るものをして、之れに服せしむることとしてある、陸軍に在りては、再び分けて第一補充兵役及び、第二補充兵役としてある、其の年限は、前者のものは七年四ヶ月で、あとの方は一年四ヶ月である、是れが前後兩者の期限である、海軍に在りては、役するに一年を以てしてある、復た第一と第二とに分けてはない、國民兵役は、やはり第一第二を以て差等をつけてある、謂ゆる第一國民兵役は、後備及び第一補充に役し、既に其の役終はれば之れに服す、第二國民兵役は、凡そ兵役に服するの義務がありて、常備、後備、補充、第一國民の各兵役にあらざるものが、すべて之れに服するのである、徵募の法は、陸軍は之れを全國から取り、海軍

は必ず沿岸及び各島嶼から取る、是れ其の水に習れてある所から取るのである、而して皆適齡の壯丁を以て、率と定めて置くのじや、

第二十六課 體操

○射御射は、弓を射るを云ひ、○六藝禮、樂、射、御、○附麗よりか、○危亡滅亡、○習慣はし、○要義至要か、○久暫暫は、ひさしきを云ひ、○強固かたい、○齊一にする、**體操**は、科學ではない、されど東西半球に於ける、各國の普通教育を見るに、乃ち他項の學科と、並らびに重んじて居る、之れを古代に徵するに、射御は六藝に列してある意であらう、さて精神と云ふものは、

事業の本である、而して身體は、又精神の従つて出づる所の本體である。身體の發育が完全ならねば、精神がよりかゝる所がない、是くの如くなれば、人民は弱い、人民が弱ければ、國が弱い、國が弱ければ、危殆と滅亡は之れに随つてくるものじや、だから體操は、其の身體を強くして、其の精神を振起させる所以である、むしろ惟是ればかりではない、群衆を樂しみ和らげ、動いて紀律に遵はせる習慣を養成するは、尤も體操の要義とする所じや、凡そ社會と云ひ、國家と云ふは、均しく群衆を糾合させて出來あがりしものである、其の強くなるも弱くなるも、又久しきも暫時なるも、必らず群衆の力によるものである、群衆の力の大にして

且つ強きときは、社會と國家とも雷によく強くして固きのみならず、亦よく長久なることを得るものじや。衆の水を積み重ねて、一ツの澤を成せば、よく大きな船を負ふて、水上をやるものである、群衆をくみ合はしてからに、一ツの繩となせば、よく大きな物をつなぎて、逸し去らせぬものである、體操の人の心志を齊一にするも、亦猶ほ是くの如きものである、嗚呼前の説によるときは、人をして勇あらしむることが出來、後の説によるときは、あはせて人をして方向を知らしむるものである、だから各國の強きは、體操に於いて強いのだと云ふても、よろしい程である、願くは諸子も、意をこゝに留めて、僅かに之れを射御と一樣にし

てはならぬ、

第二十七課 自來水

杜 亞 泉

○茶壺ちやう茶瓶を云ふ、茶つぼと思ふべからず、茶を入れるキフスを云ふなり、○壺嘴こし茶瓶のくちやう、○凹處あちやくくぼき、○山泉さんせん山上の泉水、○安置あんちおき、○分布ぶんぷ分けて布ぬりたり、をれたりして、○四通八達しつぽんぱつたつ四方に達するの意、○曲まが折流せりゅう通がながれ通ずるを云ふ、○澆灌やうかんかける、○洗刷せんせつぬぐふ、○源々げんげん接濟せつさいながれ来て、あとからもく、ついでいてたへざるを云ふなり、○草木青葱さうもくせいそうくさきが、あを、○通衢つうく潔淨けつじやうよくさつぱりとして居るとの心、○汲取きつしゆのろう水を汲み取る、○回祿くわいろく之災のわざはひ火事はいでやける

○汲取之勞きつしゆのろう勞苦らうこと云ふ心、○回祿之災くわいろくのわざはひ災厄さいあつを云ふ、

講義 格物家かくぶつかとは、物理學家ぶつりがくかのことである、即ち物理學家ぶつりがくかの議論ぎろんする所ところ

を照らして見るに、水流すいりゆうと水源すいげんとは、必らず平均へいきんして居るものじや、之れを茶壺ちやうに比して云ふに、壺中こちゆうに水みづが充滿じゆうまんすれば、必らず壺嘴こしからあふれ出るものじや、中にへだつるに、凹處あちやくを以てしてあれど、亦之れを阻さみ止むることが出来ぬ、此の理りに準據じゆんきよして、以て自來水じらいすいを造つくり、水を以てして屋肉おくないに流れ入れしめ、應用おうように便利べんりならしむるやうにする、其の法はふは、城外じやうぐわいの山泉さんせんに於いて、鐵管てつくわんを据へつけ、それにて水を引ひきて城内じやうないに達せしめ、各街巷かくがいこうに分布ぶんぷして以て、各家かくかに及ぼすのである、家の高さ五六階かいといへども、亦よく流れ入れしむる、されど近ちかごろは、自來水じらいすいを造つくるものもたぐみになり、僅わづかに山泉さんせんの下流かじゆうによるのみならず、上海しやうはいの下海か

浦の自來水廠の如き所にては、並びに山上に水源地をおくのではなく、乃ち機器を以て水を汲みて、之れを十分に清ました上、それをして自來水の總管内に流れ入れしめる、水は即ち管中よりして人家に達するやうにしてある、總管より多管に連接させ、其れよりよく四通八達し、曲折流通して、各家の用に便するのじや、日用の飲食を除く外、又よく田園にそよぎかけ、街道をあらひ去り坏して、源々折濟して、まことに之れを取りて更らに盡さず、之れを用ゐて少しも竭さることのないやうにしてある、故に凡そ自來水のある所は、青木も青葱として、通衢も潔淨である、既に水を汲み取る勞苦を免るゝことが出來て、且つ火災にあいて、

家産物品を焼失させる損害を防ぐことが出来る、其の便利にして用途の廣き、果して如何となすか、

第二十八課 海

清國國文教科書

○水天一碧なるみどり色じやの意、○白帆點々にひとつく見ゆるの意、○巨浪きなみ、○巖礁暗礁、○水禽水とりを云ふ、○浮泊又とまつたりする、○光景と云ふ心、○凄然しい貌、○浩々蕩々ば、がらりとして見はてなき所を云ふ、○無二依傍がないの意、○珍異かほつたもの、○雜生りて生出する、○寒燠たゝかさ、

講義 天が朗らかに晴れ、風のそよ〜と和らかな日に、遙かに海上を

望めば、水も天も一ひの碧色で、白帆が點々として、其の間を往來して居る杯は、甚だ樂しむべき現象である、所が俄然として風が起り、雲が四方をかこめば、山の如き巨浪が、驟かに巖礁を拍ちて、雪をはさちらすが如くに見ゆる、そうして水禽が二ツ三ツ、去來の浪に随つて、浮泊して居る杯、其の光景は又、悽然としておそるべきありさまである、されど是れ海岸に於いて之れを觀るに過ぎざるのである、若し乃ち陸地に達ざかり、大洋に出づるときは、浩々蕩々と見えて、實に空々として依傍する所がない、又或は潜水器に座して、深く海底に入りて見れば、又種々なる珍奇、怪異の動植物の、其の間に雜生して居るを見るであら

う、地球の表面は、海は土地より多く、海は四分の三に居て、土地は四分の一しかない、其の面積は、凡そ一萬五千萬方里あると云ふことじや、或は大洋となり、或は内海となり、又或は口岸となり、或は氷洋となりて、其の海水の寒燠も一樣ではない、又風景も大いに異なりて居る、其の水色に綠色なるものもあれば、黒色なるものもあり、黄色なるものもある、深淺の度合ひに至りても、亦各々同一ではない、大洋中最も深きものは、一萬六千餘尺に至る所ありと云ふ、

第二十九課

潮汐

杜 亞 泉

○行動うごく、○漲退はしほのみなきるを云、○吸引つはる、○吸力よせる力、○高起ちあがる、○低落ちこむ、○月朔一日、○月望五日、

激汐は、洋海水の行動するのである、朝にあるを潮と云ひ、夕にあるを汐と云ふ、一晝夜に共に漲退することが二度である、日と月の吸引する力に由りて、そう云ふこととなるのだ、日にも月にも各々吸引力がある、そうしてよく水を引きて地を離し、高起せしむる、是れを潮漲とするのだ、而して日月の吸引力を受けざる所は、水は即ち低落する、是れを潮退と云ふのだ、其の月の一日の時は、日月は同じく一邊にあるので、吸引力は相合して居る、よく水を引きて地を離るゝこと更らに高

ければ、其の潮も更らに大となり、其の月の十五日の時に、地球はほゞ日と月との中間にある、だから日も月も各々水を引きて高起せしむる、其の力も亦大じや、但月の地球を離るゝことは、日に比すれば更らに近きに因りて、其の吸引力がやゝ大なのである、故に潮の漲退は、恒に月に随つて來るのである、支那にては、今以て太陰曆を用いて居る、其の心して之れをよまねばならぬ、

第三十課 捕鯨

齋藤正謙

○辛卯のう、○南紀伊の國、○捕鯨專る事實と云ふ心、○群漁の漁夫、○走舸ことの

はやき ○鏢 投じて以て魚を捕獲する物の名、○旄 旄は元のさきにはたをつけしもの云ふれ、○衆 衆は元とはたをつけしもの云ふれ、○漁長 漁夫の、○衆 衆は元とはたをつけしもの云ふれ、○進退 分合も合ふも云ふ心、○逆 いかむかふを云ふ、さか、○鼓 鼓をたたく、○鯨背 せな、○壯夫 勇壯なる、○邪許 いかふとよむべからず、○鼓 鼓をたたく、○沙 沙のまき、○先登 先登がけ、○赤壁 赤壁の曹操を討ち破りし所、○采石 采石の時舟師をひきいて進軍せし所の地名、○紀律 紀律の厳重、○進退 進退の節りたりする節度を云ふ、○得 得は二人の死力一はたらかしむるを云ふ、

今茲天保二年辛卯の夏の初めに、玉井生が南方紀伊から来て、さかん熊野浦の捕鯨の事を談じて曰ふ、鯨の來るは、毎年冬と春との中間にあり、おほくの漁夫共は、走舸を具へて待ちかけて居る、そうして

ほら貝の鳴るのをきけば、輒ち出發する、其の船の早きことは、まるで電光のやうじや、各々三人を載せ、一人は櫓をあやつり、一人は鏢を持ち、一人は旄を見て居る、旄の長さは三丈ありて、漁夫のかしらが之れを執りて居て、高き岡の上に立つて、之れを右にさしまねげは、衆舸は從ひて右し、之れを左にさしまねげば、亦從ひて左し、進退にも分合にも、惟旄を見てきめるのじや、そうして洋中に漕ぎ出して鯨をむかふるのだ、鯨の來るや、其のさままるで山嶽の移轉するやうである、沫をはきかけて雨を成し、むかい近づくべからざるありさまある、乃ち轉じて其の背の方に出で、鼓譟して之れを怖れしめ、鯨をかり立て、灣内に

入れる、鯨が灣内に入れば、衆舸は之れに従ふて、先きを争ひて鏢をなげかけ、以て鯨の背にあつめるのじや、鯨の創が重くて、將さに斃れんとするに及び、一人の壯夫を募り、水中におどり入らしめ、刀もて其の腹を屠らしめ、索を貫きて出でしめ、繋ぐに兩大船を以てして、邪許のこゑをかけて、之れを曳きばらせ、沙際に至る頃になれば、金が鳴りて衆舸は散じてしまふ、そこで酒をおいて衆漁夫をもてなし、先登者及び水に入りて刀をふるいたるものを賞し、各々十金づゝを興へ、其の餘のものには、夫れく興ふる所に差等があると云ふ、余其の言をききて、其の事を壯なりとし、思へらく、赤壁や采石の戦争といへども、何を以

て之れに過ぐるこゝとやららん、其の紀律の嚴重にして、其の進退の節度ある、及び高く募り重く賞して、人の死力を得ること、深く兵法を悟れるものに似て居ると。

第三十一課 紀文海運

菊池純

○提封四方の封内をあげて之れを計かる、○柑子を云ふ、○船載こぶ、○三都都東京、京都、大阪を云ふ、○利市利益、○東洋にあらざ、寧ろ東海と記するに如かず、○一顆つぶ、○敗漏ぶ、○解しての意、○修理手なほすを云ふ、○揚言ものを言ふ、○虚妄虚言妄語に云ふ、○信人人なりとの心、○食言で、何事も實行せぬことを云ふ、○壯丁云ひ、二十歳

を丁と賭博をうつ、○無頼悪少兇悪なる少年、○酒饌けのさかな、○痛飲みたたる、
○爾汝、呼びて、へだてなき友となるを云ふ、○逆浪くなみ、○凶服、不幸のある時に着る衣、
○質明け、○黙禱、無言にて、○食頃の間、○轉瞬、する間、○洪濤、なみ、○行程、のり、
○都商の商人、○神助、たすけ、○監收、づけ、○往還、へり、

文左衛門は、幼名を文吉と云ふた、紀州加田浦の人である、或は
曰ふ、熊野の人なりと、南方紀伊の封内には、多く密柑を植えて租税
に充てゝ居る、そうして毎年船に載せて京都、大阪、東京の地に運漕し
て、利益を收むること鉅萬でありて、往々富豪となつたものもある、此
の年東海に風浪大いに作り、四方からつどいくる海船の、江戸の品川に

輻輳するものも、皆風を怖れて敢へて出帆せぬ、だから江戸市中の密柑
が、俄かに其の價を増して、一顆大むね二三錢に至りたので、都人は皆
領を長くして、日に、其の船の入港せんことを望んで居る、文左衛門
は之れをさして、海に航して密柑を輸入せんとして居た、たま、邑人
の、海船を藏するものがありたが、其の敗漏して用に立たざるを以て、
解きはなして薪材にせんとして居た、文左衛門は之れを假り受け、大修
理を加へて、四五日費して、工事をおはり、乃ち揚言して曰ふ、よく風
浪を冒して、航海して江戸に行くものあらば、一人ごとに百金づゝを興
へんと、人皆其の虚言妄語を笑ひ、一人として之れに應ずるものがな

つたが、内に一人あり、あざむかるゝを承知で、其の募集に應じた、すると文左衛門は百金を興へた、そこでみな駭いて曰ふ、文左衛門は信義の人である、豈に食言して人をあざむく人ならんやと、近邑の壯丁共の、來りて募集に應ずるものが、十九人ありた、是れ等の人々は、皆賭博してからに、十分に酒をほしへまゝにのみ、亂暴をはたらく無頼の悪少年共であつた、文左衛門は大いに喜び、悉く其の約を踐んで、百金づゝを興へ、大いに酒饌を具へ、痛飲すること累日に及び、互いに呼び合ふに爾汝を以てし、意氣が相投合して、約して兄弟となつた、時に海上は風ます／＼あらく、逆浪は天を蹴るばかりじや、一行十九人

の人々は、皆凶服を着け、前以て必死を覺悟してからに、萬に一生を得るの決心で出帆せんとして居る、あくる日になると、質明に文左衛門は起き出で、大船に密相五六千箱を載せ、徑ちに刀を抜よて其の髪を截り、之れを龍王に献じて、默禱することしばらくであつたが、默禱が訖はると、船頭に立ち出で、一刀をふるつて其のともづなを斷つた、すると船は飛び帆は怒り、一轉瞬百里の勢いで、大なみを破ぶりに東に走ること半日、遠州洋に及べば、風はますます順にして、帆は益々驕り、凡そ海上三百里の行程を、一晝夜にして江戸の品川灣に達した、此の時海船の入港したものは、あとにもさきにも、たゞ此の一艘のみであつた、江都

の商人共はよろこび迎へて、全く神助の致す所とした、文左衛門は乃ち
價を定めて密柑を賣り出し、利を得ること萬倍にて、一朝にして五萬金
を獲た、

上國とは、上方地方を云ふのじや、上方地方は、素より鹽漬の鮭魚に乏
しい、そこで文左衛門は十萬尾を買ひ入れ、又船載して出帆し、之れを
京都攝津の諸國にひさぎ、利益を得ること十倍に及んだ、江戸から紀伊
までの往還に、十有餘日を費やし、十五萬金を博し得た、後に家族を挈
げて江戸に赴き、遂に其の富三都に冠たるにまで至りた、

第三十二課

華佗善醫

李

瀚

○兼通 かねつうに二ツにも三ツにも、○壯容 ちやうちやうち容貌のやう、○針灸 せんしうはりをたて、
○斷截 たつたり、○湔洗 せんせんあらう、○除去 じよきよのぞき、○疾穢 けがれ、
○積聚 まれるもの、

後漢の華佗と云ふ人は、字は元化と云ひて、沛國譙の人である、
數經に兼ね通じて、養性の術を曉りて居る、だから年まゝに百歳になら
んとして居るにかゝはず、猶ほ壯年者のやうな容貌があつた、時人は
それがため、華佗を以て仙人なりとして居た、藥の方劑に精しく、處方
を見れば數種に過ぎぬが、其の効は神のやうじや、又針灸するに、數處

に過ぎぬけれども、忽ちにして全快する、若し疾が發して内に鬱結し、
薬でも針でも力及ばざる時は、乃ち先づ酒を以て麻沸散と云ふねむりぐ
すりを服ましめ、既に酔ふて何も覺へなきに至れば、腹なり背なりを刳
き破ぶり、積聚せる惡血を抽き取り、若し其の疾い腸胃にあれば、腸胃
を斷截してあらさよめ、疾穢を除き去りて、元のやうに縫ひ合せ、つ
くるに神膏を以てすれば、四五日にして其の創が全癒する、そうして一
ヶ月の間に平復してしまふ。

第三十三課 和氏璧

韓非子

○玉璞があらたまると、み玉人く職人、○爲レ誑云ふ、あさむくあり、○別者るも
のな、○貞士の士、○理を云ふ、

楚の人に、和氏と云ふものがあつて、玉璞を楚の山中から見つけ
得た、そこでそれをさしげもちて、楚の厲王に献じた、厲王は玉人をし
て之れを鑑定させた所が、玉人曰ふ、是れ石なり、璞にあらざる也と、
王は和氏を以て已をたぶらかすものとなし、其の左足をさつてしまつた、
厲王薨じて武王位に即くに及び、和氏は又其の璞をさしげて武王に献じ
た、武王は又玉人をして之れを鑑定せしめた所が、又曰ふ、是れ石であ
ると、王は又和氏を以て誑となして、其の右足を射つてしまつた、武王

は薨じて文王が位につかれた、和氏は乃ち其の璞をいだきて楚山の下に
哭すること、三日三夜に及んで、涙つきて之れにつぐに血を以てした、
文王は其のこゑをきき、人をして其の故を問はしめ、其の事情を知りて
曰ふ、天下の足さらるゝものは、随分に多いが、子は何せひとり哭する
ことの斯くも悲しきやと、和氏曰ふ、吾は足さられしを悲しむのではな
い、夫の寶玉にして、之れに題するに石を以てし、貞操の士にして、之
れに名づくるに誑を以てするを悲しむのである、是れ吾の甚だしく悲し
む所以であると、文王はそこで玉人をして其の璞を理めしめて、遂に至
寶を得た、そこで之れを名づけて和氏の璧と曰ふたのじや、

(86)

第三十四課 采珠

蔣 維 喬

○珠貝を云ふ、○珠船ふれを云ふ、○黄昏時、○更番番をする、○絳石色の石、
○小筐きはこ、○雙函 一個の貝を爲すものなり、雙函は、ふたつのはこと云ふ心、○内
螺貝の内にあ、○身軀糜爛くさつてしまふを云ふ、

講義 印度の南方に、一ツの島がある、之れを錫蘭と云ふ、其の海から
眞珠貝が産出する、冬の時季になる毎に、眞珠を採取する船が集つてく
る、眞珠貝採取船の出づるや、必らず黄昏を以て出づる、一ツの船に二
十人ばかり乗り込み、十人は船を行き、十人は水中に没し去る、水中に

(87)

没するものは、五人を以て一班となし、更番して水中に入り、夜分から夜あけまでに達する、船底に五ツ、のあかさ色の石がある、之れを繋ぐに繩を以てし、水中に入る人間は、足を以て石をふみ、右手に繩をとり、胸の前にちいさき筐をかけ、真珠貝を拾い取ること、大約二分ばかりにして、船人は繩を收め、之れをひきて水中より出すのだ、真珠貝の海中より出づるや、雙方の貝殻は、きびしく閉ぢあはせて、内にある身は、猶ほ未だ死なずに居るのじや、力めて之れをつんざけば、其の内にあさめてある真珠をさすつけてしまふ、そこで貝を地中の穴にあさめ、むしろの上にならべるのじや、之れを久しくしておくと、内の身が死んでし

まつて、貝殻がひらき、真珠が別にきずつくことなくして出づる、真珠を採取する人は、一夕中に、海に入ること四五十九たびす、一度に百個の貝を拾はれる、されど久しく水中にとどまりて居れば、口や鼻から多く血が流れ出づる、若し鯨魚に遇ふときは、からだがみな糜爛してしまふのである。

第三十五課

子罕辭玉

練習用につき
解を附せず

第三十六課

駝鳥

重野安釋

○絶倫あつりん他たにすぐ、○駿馬しゅんばみやかなる馬、○超過てうこぐる、○尾翼びよくはれ、○首要物しゅようぶつとの心、
○模造もさうこしらへる、○屬意ぞくい心をつけ、○舊約書きうやくしょ耶蘇教徒よそくたうの經書、○孵化ふくわせる、○翼よく覆ふくば
さにておほ、○嘔煦おうくあたふきかけ、○常鳥じやうてうへのとり、○佳味かみぢのもの、○荒野くわうのほら、
ふを云ふ、○懼きよ怖おそい、○謹慎きんしんぶかい、○活くわつ潑ぱつそのはたらきのい、○近接きんせつつてくる、○草叢さうそうむら
○怯懦けつにうよくび、○生吞せいとんのみにする、○破片はへんはし、○鐵片てつぺん鐵てつのき、
か、○飼養しやうやたてる、○檻中かんちゆうなか、○亞弗利加あふりかに住む駝鳥たてうは、其の形狀駱駝らくたに似たるを以て、名づけら
れた鳥である、其の高さが、七尺から十尺に至りて居る、其の走ること
の速すみかなると、體からだの強つよさが、洵まことに絶倫なのである、其の背上せせうに、二人
を載のせて走るに駿馬しゅんばも猶ほ之れを追い越こすことが出来ぬと云ふ、聲こゑは獅し

子こに似にて居る、土人どじんも亦またまゝ之れをさゝあやまると云ふことじや、其の
尾おの翼つばの長羽ちやうよくは、嘗かつて貿易品ぼういひん中の首要しゅようとなつて居たこともある、近年きんねん模
造さうするに、他鳥たてうの羽はを以てして居る、亞弗利加あふりかの駝鳥たてうは、世人せいじんの注意ちゆういす
る所ところとなり居りしことは、むかしからそうである、舊約全書きうやくぜんしょ中にも、亦また
しばく之れを見るみることが出来る、其の卵たまごは、甚はなはだ異ことなりて居て、重量じゆうりやう
は殆ほとんど三磅さんぽうある、其の卵たまごを産うむときは、之れを沙すなの中に置おき、太陽たいやうの
熱ねつを須まつて、ひとりてに孵化ふくわするのじや、敢あへて翼つばを以て覆おほいかくして、
あたゝめてやると云ふことなどはない、其のやゝ熱氣ねつかの少すくなき土地とちにて
は、孵化ふくわする法はふは常鳥じやうてうの如ごとくである、むかし希臘ギリシヤの文士ぶんしは、しばく

駝鳥を詠じたことがある、又羅馬人は、駝鳥を以て游觀に供し、其のあたまを以て佳味として居て、好んで食膳に供したものである、其の荒野に居るものは、性質は怯懦で、謹慎で、そうして活潑である、故に人は之れに近接することが六かしい、されど如し急に之れを追ふときは、たゞ頭を穴か或は草叢の中に入れて、それで以て自から安すしとして居るので、遂に人に獲らるゝのである、其の檻中に飼養して居るものは、礫、小刀、硝子の破片などを其のまゝで呑むけれども、少しも害がないと云ふことじや、亞米利加の駝鳥は、其の大きさは亞弗利加産のものゝ、半分にも過ぎぬと云ふことである、そうして羽毛も亦、少ないと云ふことじ

や、しかし其のよく鐵片や瓦礫などを呑むことだけは、少しも異なる所はないと云ふことじや、

第三十七課

鶏肋

李

瀚

○俊才しゆんさい人にすぐれたしゆほ官名、帳簿しゆほを掌る役、○外曹ぐわうそうほかのともがらにて、せきけいけつせり歸計決矣都にかへると云ふ決心、○幾決きけつ事にさきだちて、せきけい歸計決矣都についたと云ふ心、○鶏肋けいりつわきぼね、たいか太尉楊震の玄孫である、がくもん學問を好みて人にすぐれた才能があつた、しやうく丞相曹操の主簿となつて居た、そう曹操が漢中を討平した時、其のついでに困りて、りやうび劉備を討たんとしたが、

進むことも得ねば、又之れを守らんとしても、功を成しがたき心配がある、其の時曹操は教を出して、唯鶏肋と云ふばかりであつた、外の役人共は、何んの事とも曉り得るものになつた、楊修のみは獨り言ふて曰く、夫れ鶏肋は、之れを食はんとしても、食い得る所がない、さらば之れを棄てんかと云ふに、何となく惜しくてならぬ、之れに依りて考ふるときは、公の歸計決定せりと、操は此に於いて師をかへした、修の幾を見事決定するは、多く此の類に似て居る。

第三十八課 信義

社 亞 泉

○奸偽之人つはりを言ふ人、○敗亂だれる、○故事事實、○歴聘まはりあるく、○聘問起居を問ふ、○已許之しなり、故に之れを許せりと云へり、

講義 人と人との交際は、全く信義によりて成るものである、若し國中に奸佞詐偽の人多きときは、其の國の風俗は敗亂して、其の國までも滅亡するに至るものである、古來聖人は信義の道を以て、教へを萬世に垂れられて、是非に信義を行へ、信義を忘れてはならぬと言はるゝものは、之れがためである、今試みに一ツの故事をあげて、諸子のために信義の貴むべきことを言ふであらう、古へ吳の國と云ふ諸侯がありて、其の公子を季札と云ふた、甚だ賢明な人で、常に君命を奉じて他國に歴聘して

居た、時に季子の歴聘した國君の内に、徐の君と云ふのがあつて、甚だ季子の佩ぶる所の劔を愛し、之れを得たしと云ふ顔色が見へた、季札は之れを贈らんとしたけれども、尙ほ他國に至りて、其の國君を聘問するの必用があるので、心の内では許したけれども、未だ之れを贈らずして去りた、使聘の事已に畢はりて回へるに及び、又も徐の君を訪問した所が、徐の君は已に死せる後であつた、季札はそこで其の劔をときて、徐の君の墓の樹に掛けて立ち去りた、或る人之れに問ふて曰ふ、死者に贈るも益する所なげんと、季札曰ふ、吾已に心に之れを許した、死せりとて負ぐべけんやと、季札の事を觀たならば、其の信義の如何に貴むべき

かゞ分かるであらう、季札の如きは、賢人と云ふべきものである。

第三十九課 紀平洲

東 條 耕

○誦讀 誦はそらよみを云ひ、○單身りみ、○僑居まぬ、○垢衣弊帯に、やぶれたをび、
○儉 儉約に、○費散ちらす、○歸期時期、○美談きはなし、○主 主にて、其の家に寄食するを、
○和煦 和合してあたい、○無悔 悔恨之色、なかにほいろがない、○異姓同居 紀氏など、
異姓の人々が一所に居る。

紀平洲は、名は徳民と云ひ、尾張の人である、幼少の時から讀書を好み、誦讀せる書籍は、既にあまねくして、通せざるものなしと云ふ

ありさまであつた、歳十七にして京師に遊學せんことを請ひ、單身之れに赴き、伊勢の人北畠世規と云ふ人と、舍を同じくして僑居し、垢のついたきものを着、やぶれた帯をしめ、粗食を食ひ野菜を噛み、務めて費用を儉約にして無益なちごりをなさぬ、是れより先き父の正長、徳民のために五十金を與へ、以て其の費用にあてしめたりしが、京に居ること一年ばかりにして、其の内の十兩を費散し、其のあまりの金子を以て、書籍數百卷を購ひ得、歸郷する時に及び、二匹の馬に駄して還りた、郷里の人々は皆之れをほめ、之れを以て美談と爲して居る、其の尾張の名古屋に居りし時、其の學友小河天門、妻兒を携へて名古屋に來り、平洲

の家を主として宿泊し居た、平洲の江戸に移りし時、又これに従つて移つた、いくばくもなく飛鳥圭洲又妻兒を攜へて其の家に寄寓した、是に於いて平洲の家には、五姓の人々居を同じくし、三家の家族襲を同じくすること、こゝに四年間であつた、時に平洲の父正長、老いて平洲の家に養はれて居た、天門と圭洲の二人は、之れに事ゆることまるて子のやうである、衣を易へて出て、日をあはせて食ひ、老者を養ひ、幼兒をなでいつくしみ、二人は平洲と交はることは、まるで兄弟の如くである、其の婦三人も亦、姉妹のやうに見ゆる、そうして相得てたのしみ、一家の人々は相和合して互いに温情をつくし、毫も悔恨の色がない、鄰里の

人々は始めより異姓の同居者であると云ふことを知らず、正長に賀して曰ふ、三賢子、三孝婦、三順孫のあらるゝ翁の身の、幸福を享くることこそに至られしは、何んと云ふ幸いであるぞやと、是れ天門と圭洲と平洲と、其の三人の婦と、三人の子を以て、皆翁の子や孫と思ひあやまりしたためである、斯くの如く、正長は隣人に羨まれたと云ふことである。

第四十課 二友

杜 亞 泉

○俄國今の露國を云ふ、○北鄙の北方の、○約伴同伴する、○一躍どりての心、○屏息仰臥あをむきにふす、○反復くりかへし、○頭面ほな云ふ、○密談ばなしをする、○患

難心配な難儀な
難ことを云ふ、

露國の北方の田舎に、大きな熊を産する所がある、多く出て、人を傷害することがある、一日甲と乙との二友人が、相約束して同道し、或る山に入り込んだ、猝かに大きな熊に出遇ふた、乙は力の大なる人である、だから一躍して溪を越へて其の難を避けた、甲は躍りて越ゆることが出来ぬ、そこで乙の援ひを求めたが、乙は更らに顧みぬ、そうして一樹の上に奔り登りて俯して之れをながめて居る、甲は如何んともする道がない、そこで息をころして仰むけになり、佯はりて死んだありさまをして居た、熊は甲の仰臥せる身體を、くりかへしくりかへして、其の

頭や面を嗅いて居たが、やゝ久しくして立ち去りた、乙は樹下より出て、かへつて甲を嘲けりて曰ふ、熊は君の耳に付き、やゝ久しく離れずに居て、殆んど君と密談して居るやうであつたがと、甲曰ふ、誠にさうじや、熊は我に告げて曰ふ、交友を擇ぶは、宜しく慎しむべきことである、凡そ安樂な時は相親しみ、患難に臨めば棄て去るやうなものとは、與に交際してはならぬと、

第四十一課

題 長安主人壁

張

謂

○世人結交須黃金、金一才黄金の力をかりて、交際を結ぶに、必ら、○黄金不_レ多

交不_レ深、情も亦随つて深くないのじや、○縱令然諾暫相許、是なりとして、一旦は承諾しても、是れたい暫時の承諾にして、決して心から許したものではない、○終是悠々行路心、ととして路行く人のやうになつて、更らに交友たる情合ひがなくなるのだ、

第四十二課

格言

四則

○二人同心、其利斷金、銳利なることは、金鐵をも切斷することが出来る、○同心之言、其臭如蘭、のにはいはは芷蘭の如くかんなげしきものじや、○與善人居、如入芷蘭之室、久而不聞其香、を、善なる人と共に居るは、芷蘭のやうなかほりのよき草もいつしか、善良なる人間になつてしまふ、○與惡人居、如入鮑魚之肆、久而

不聞其臭。○ 兇惡ふる人と共に居るは、ほしうを賣り捌き居る商店に這入るやうなものじ
ものじや、されどそれ丈自分も、悪人の仲間入りをして、悪人となつたのである。○ 君子交絶。不_レ出_ニ惡聲_一は、君子と云ふもの
絶交することあるも、其の人のあしきことを、世に紹介して喜ぶやうなことをせぬものじや、○ 寧人負我。無_ニ我負_一人他人が、
我が身に背くやうなことがありても、我は決して、人にそむくやうなことはせぬとの心。

第四十三課

圖書館

莊

俞

(104)

○ 爲_レ要_ルとの心。○ 浩繁して且つ澤山あるを云ふ。○ 至古至精之本りて精細なる本は
意、○ 流傳につたはる。○ 遊歴まはる。○ 如_レ俄露國を云ふ。○ 如_レ德を云ふ。○ 如_レ美
國を云ふ。○ 几案ルを云ふ。○ 列坐すはる。○ 隨在てと云ふ心。○ 博覽みる。○ 建立

たて
る。○ 收藏ておつ。○ 購置いおく。○ 衆覽の觀覽にの心。○ 規模へかた。○ 無_ニ喧嘩_一
かまびすしくさばぐ。○ 無_ニ汚損_一ことなしの意。○ 公共之物物はと云ふ心。○ 保護
之責任はの心。

講義 學問を求め、智識を増すは、其の端緒甚だ多ふけれど、しかし讀

書を肝要とするのである、しかしながら書籍の浩瀚にして繁多なる、豈
によく一々にして備へおかれやうや、且つ至りて古く、又至りて精細な
る書籍は、其の世間に流傳すること、甚だ僅少である、其の財力が、よ
く之れを備具するに十分でも、或は之れを得られぬのじや、即し幸にし
て藏書に富みて、千萬卷の書を藏して居ても、時に或は四方の國々を遊

(105)

歴してあるくに、又どうしてよく盡く之れを挈へて、歩行することが出来やうや、是に於いて圖書館と云ふものが貴ばるゝのじや、外國の圖書館は、佛國の首府巴黎を以て、最も鉅大なるものとしてある、其の藏書の豊富なること、三千餘萬冊に至ると云ふ、此の外、英國の如く、露國の如く、又獨逸國の如く、米國の如きも亦、おのゝく千萬を以て計ふる程ある、そうして館中には几案を備へ置き、列坐して觀て居るものが、常に五六百人ある、此れ官立のものに就いて言ふのじや、公立、私立の圖書館の如きに至りては、所在皆是れである、凡そ多くの書籍を博く見んと欲するものは、圖書館について、見ぬものはない、

我が清國にては、乾隆年中に、四庫を建立し、古今の圖書を收藏した、并びに揚州、鎮州、杭州に於いて、閣を設けて之れを備へた、近年有志の人士も、時に亦資金を集め、家を賃し、圖書をあがない置いて、以て衆人の觀覽に備ふるのだ、其の規模は狭小でも、用意は固より甚だよいのである、凡そ書を圖書館に觀るものは、必らず嚴重に規則を守り、喧嘩するものもなく、汚損するものもない、蓋し公然たる共有の物は、人々皆一様に、之れを保護する責任があるからである、

第四十四課

博物館

蔣 維 喬

○百聞不如一見ひやくぶんはくしかにいっけんは 百たび聞くよりは、一たび見た方が増してあると云ふ心、○實質之物じつしつもの 實物と云ふに同じ、○模型ぼけい やうたにこしらへた物を云ふ、○目觀之眞めくわんのしん 且確かつかく 目で見たもの、眞實しんじつ、○羅致らち つめる、○殊形異狀しゆけいじやう ことかちに、ことなるさまと云ふ、○標ひょう 立て、○遺留いりゆう のことと、○襲存しゆそん 存在そんざい さす、○考據かうきよ 證據てんこ の用に供たす、○羅列られつ 繁富はんふ 物品ぶつひん をならべつられることが、○啓閉けいへい ちたりたりと、○新奇しんき 之物もの くらしてめづらし、○送致そうち とける、○儲藏ちよざう おさめる、○搜羅そうら つめる、○規模きぼ 方を云ふ、

譯註 世間せけん のことわざに曰いふ、百たび聞くよりは、一たび實地じつち に見た方が増してあると、だから實質じつしつ の物もの を知らんと欲ほつ するときには、書籍しよせき は圖畫ずゐ

に及およばぬ、圖畫ずゐ は又また、模型ぼけい に及およばぬ、模型ぼけい はつまり、實物じつぶつ に似たものである、されど猶なほ 目でこれを觀みるの眞實しんじつで、且かつ 正確せいかく なるに及およばぬものじや、おもふに世界せかい の物の蕃多ばんた なる、決して一人一家にんか の資力しりよく のよく羅致らち し得うる所ところ ではない、且かつ 其その 物の産さんする時ときと、土地とちと、又また 至いたりて一様いさむではない、又また どうして従したがつて、あまねく之これ を觀みられやうや、曰いく、博學ぼくがく 院いんと云ふものゝあるありて、あまねく之これ を見みることが出来るのじや、博物院ぼくぶつえんと云ふものは、動物どうぶつ もあれば、植物しよくぶつ もあり、礦物かうぶつ もあれば、人造じんぞう の物もの もある、殊形異狀しゆけいじやう のものが、一室しつない 内にあつまりて、おのゝ其その の名稱しやうめい をあらはしてある、且かつ つひとり現今げんこん の物もの ばかりではない、即すなはち上古じやうこ の

遺留する所のものも、亦廣くさぐりて、つき／＼て存在せしめざる物はない、是れ智識をたしひるめ、考據に資する所以であつて、其の意は至つて善意なのである、

外洋の各國都會には、皆博物院がある、そうして種々なる物品を羅列することが、實に繁富である、それから之れを啓閉するに時間がある、是れ衆人の遊觀に供する所以である、而して衆人も亦、たま／＼新奇の物品を得れば、やはり往々に院中に送致してくれる、だから古今の物品の儲藏は、日にますます、富むばかりである、我が國は今日に至るまで、まだ博物院と云ふものがない、たゞ上海に現に一區ある、是れは外人の建

設する所のものである、物品の搜羅は、未だ甚だ備はりて居らずとは言へ、しかし規模丈は、亦や、備具して居るのである、

第四十五課

足利學校

重野安釋

○執事役名、執權に代はりて、天下の無二偏私一ぐしことばなしと云ふ心、○再興びおとろへたるものを、再、○祖業事業との心、○學田し所の米穀を以て、學費に供するため、田なり、つまり學校維持の資金と云ふが如し、○生員云ふ、○蒐集つめる、○羣籍の書冊、○海外にて、當時の朝鮮支那等、○分儲くはへる、○頻年類はつらなると訓ず、○兵亂たるを云ふ、○海内本國中と云ふ心、

講義 上杉憲實は、其の主人足利持氏を殺せるを以て、有名な人間である。持氏を殺して鎌倉の執事となつたが、人心を籠絡して主人を殺させる程の人間故、武道を講じ、文學を修めて、政事に偏頗私情と云ふものがない、そうして金澤の文庫を再興し、又下野の國の足利は、足利幕府の祖業の、壁まる所の土地にして、自分の部内に屬し居るを以て、學校を興し、學田を置き、以て多くの學生を養成した、一方は又、多くの書籍をよせあつめたり、或は之れを海外諸國から購求したりして、足利學校と金澤文庫に分ち備へた、時に連年のやうに兵亂がありて、海内に復た學術を講究するものがない、學校の設けられしは、つまり此れを以

て冠としたのである、

第四十六課

金澤文庫

重野安繹

○崇ニ典 籍一を尊崇する、○引付衆代の役名、○政務之暇つかうひまを云ふ、○校訂しらべて、○手寫うつす、○元々げむ貌、○晩年後、○官府之秘關する書類、○佛刹之藏藏せる書籍、○船載來たもの、○搜訪づれる、○鈔寫うつす、○蒐羅つめる、○墨印を捺す、○跋ニ其尾一跋文をかきしるす、○題識しるす、○祖業事業、○實學實地の學問、詩歌文章の如き、○典籍書籍、○歸存存在し居る、○儼と云ふ心、○實舍學舍を云ふ、○稽古 かんがへ知る、

講義 北條實時は、實泰の子で、義時の孫である、越後守となつて居たが、學文を好み、典籍を尊崇する人であつた、建長年中に、清原教隆と共に、引付衆となり、業を教隆及び、其の子俊隆に問ひ、政務の暇があれば、校訂もし、手寫もして、兀々としてめはげみて、倦怠の色がなかつた、晩年に、退きて其の邑金澤に居り、稱名寺と云ふ寺を創立し、又文庫を其の傍らに興し、多く群籍をたくはへた、役所の秘密に關する書類や、各寺院に秘藏せる書籍からして、以て海外より船載せしものに至るまで、さがしたづね、あつめうつしてからに、力をさはめて蒐集網羅した、そうして一卷毎に、金澤文庫の四字の印がある、儒書は黒肉で捺印し、

佛書は朱肉で捺印し、一書を獲る毎は、教隆をして其の書の末尾に跋文をかゝせた、教隆の歿して後は、輒ち自から題識した其の子の顯時、孫の貞顯、曾孫の貞將共、よく先祖の業を繼ぎて、實學を墜さんだ、其の後諸國に兵亂が作り、典籍が多く亡びてしまつた、而るに此の文庫のみは、歸然として存在し、儼然として巽舎の如きありさまである、書をよむ人々は、此れによりて以て、古の事を稽ふることを得たと云ふ、

第四十七課

絶代名士

安 積 信

○編纂つめる、○彰考館日本史等の大著述は、此の館より出たり、○秘記る記事、

○異典（てい）にことな
○蒐索（しゅうさく）とむるも
○朽簡（きうかん）零編（ぜいへん）は、くちたる竹のふたを云ふ、零編は、
せるものを云ひしなり、○謄寫（たうしやう）とむる、○輸致（ゆち）いたす、○浩富（かうふ）裕（よ）にして富、
○宸聽（しんとう）に達するを云ふ、○
睿感（えいかん）ならざるの意、○融災（ゆうさい）にあふを云ふ、○秘閣（ひかく）を蔵せし書庫を云ふ、○宸翰（しんかん）御直
云、○榮寵（えいとう）る寵遇（とうぐう）、○平素（へいそ）つれく、○徵召（ちゆうしやう）だす、○褒貶（ほうてん）とは、其のつみをせめて、其
の身分をおとすを云ふ、○興奪（きうだつ）うばふなり、○裁定（さいてい）確定する、○叙事（じじ）明暢（めいちやう）さらかてのびくとして
居、○正天（せいてん）大いなるを大と云ふ、○遺意（いゐ）ける意見、○曠代（くわうだい）程と云ふ心、

講義 水戸義公（みづとぎこう）とは、光圀（みつこう）卿を云ふのじや、公は古の道を好まれ、學事（がくじ）
に志（こころ）あつく、心を編纂（へんさん）の業に留めて居られた、そうして彰考館（ちやうかうくわん）と云
ふ所を建て、天下（てんか）の書籍を聚められた、それから秘記異典（ひきい）があると云ふ

ことを聞かれば、輒（すなはち）ち學生五六人を遣りて、之れを蒐集（しゅうしやく）搜索せしめら
れ、朽簡（きうかん）零編（ぜいへん）でも、必（かな）らずこれを謄寫（たうしや）して輸送（ゆそう）せしめられた、千里の遠
き道であるがらとて、決して之れに沮喪（そさう）するやうなことはない、是れに
由りて藏書（ぞうしよ）の浩瀚（こうかん）豊富なることは、諸藩（しよばん）の冠（くわん）と言はるゝ程であつた、嘗
て皇朝（くわうてう）遺文（いぶん）三十卷をあつめたが、其の事後（じご）西院（さいいん）天皇のおきゝに建し、睿
感（えいかん）なゝめならざることありて、名を扶桑（ふさう）拾葉（しやく）と賜はれた、皇宮（くわうきゆう）の祝融（しゆくゆう）
氏の災（わざ）にかゝるに及び、秘書省（ひしょしやう）の舊藏書（きゆうざうしよ）は、多く焼けてしまつた、そこ
で公は嘗て寫させし所のものを獻じた爲め、秘書はそれによりて、亡（な）び
ざることを得た、帝は公に詔（みことご）して、鳳足（ほうそく）硯（いん）の銘（めい）を作らしめた、即ち其

銘を撰びて献上した、帝は大いに悦びたまへ、御直書を賜ひて、之れを褒めさせられ、其の句の入に、文を備へ武を兼ね、絶代の名士と云ふ語があつた、公は其の光榮ある寵遇に感じ、聖語を彫りて印とされた、平生皇朝正史の備具せざるをいたみ、世に名ある儒者五六十人を召しあつめ、編修局を開らして編修させ、大日本史三百巻を作つた、凡例をあけしめし、褒貶興奪は、多く公の裁定せられし所なりしと云ふことじや、そうして叙事は明暢で、議論は正大じや、頗る孔子の春秋の遺意があると言ひはやして居る、洵に曠代の盛事であると思ふ、麟經の解は、本書の頭がきにある、故に別に贅せぬ、

第四十八課

宣長明ニ邦典

重野安繹

○邦典、邦家の、○古道、王者のみち、○古事記、書名、我が邦に於け、○公事、公然たる事、○古言、古語、○萬葉集、歌集なり、○暹勉、つとめつ、○躰、等を等級をば、○直前、すむ、○服膺、心のうちへた、○鑽研、たがれにて、鐵をきるもの、研はみかく、○攻苦、せめく、○淹博、淹は、ひたすなり、物にひたさるゝこと久しき、○精核、精はくはしきを云ひ、核はかれの意、核は該のあやまりなるべし、何となれば、核はされなり、くさのねなり、斐と同じければなり、○貫穿、うがつ、○前後、一次、さきにも、一度なり、○質、疑義、を質問するを云ふ、

講義

本居宣長は、伊勢松阪の人である、常に邦典を講究し、古道を顯

明にするを以て、自分の責任として居た、そうして自からおもへらく、古道の今日に傳はりたるものは、古事記のありし影である、因りて古事記に註釋して以て、世の中に公やけにしやうとしたが、良師のなきを心配して居た、たゞく加茂真淵と云ふ國學者が、公用を以て松阪に來た、宜長往いて之れに面會し、弟子たるの禮を執りて、具さに其の意見を陳べた、真淵は之れに謂つて曰ふ、古道をあきらかにするには、宜しく先づ古言を研究すべきである、古言を研究するには、萬葉集より善きものはない、予は精力を萬葉集に専らにして、將さに漸やく古典に及ばんとして居るのだが、今は年老いて、其の大望を果すことの不可能な

るを認めて居る、子は年方さに壯かんじや、黽勉して懈らずんば、必ずよく業を成すであらう、されど事には先後と云ふものがある、高き所に登るには、必らず卑き所よりせねばならぬ、等を躡へて直ちに進んては、竟に得る所のないものである、子それ之れを記憶して、等を躡へて直進してはならぬと、宜長は其のことばを、胸の裏にたゝみこみ、鑽研もし、攻苦もして、遂に古事記傳四十四卷を著はし、三十六年を経て出來あがつた、時に年が六十九であつた、淹博精核で、よく古今を貫穿して居る、邦典はこれに因りて以て、大いに明らかなつたのじや、其の眞淵に見へたは、あとにも先きにも、たゞ一度である、其の後はたゞ書面

をよせて、以て疑はしき事を、質問したばかりじゃ、されど物言ふときは、必らず先生くと稱し、終身衰へたことはなかつた。

第四十九課 日記

文學 初階

○一 小簿 ひとつづのち、○三 益利益 さんえき、○査 検 さけん してみる、○往 日 かうじつ の日、○練 習 れんしゅう 熱する、○檢 束 けんさく つけばり、○身 心 しんしん からだと、○間 斷 かんだん される、○爲 なす 無 な 恒 とつね いものとする、○巫 醫 ふい なり、
か
ん
な
ぎ
な
り、
醫
は
醫
者
な
り、

凡そ人たるものは、毎日爲す所のことをば、當さに一ツのちいさ
い帳簿に書きつけて、以て之れを記しおかねばならぬ。日記を作れば、

三ツの利益がある、能く往日作せし所の事を、しらべて見るのが一ツの
利益である。此れに藉りて、記事の文章を練習するのが、二の利益であ
る。如し人に告ぐべからざる事がありて、日記中に寫すべからざるもの
を爲さば、之れを戒めなくてはならぬ。此れによりて以て己の身と心を
しばりつくれば、三ツの利益である。たゞし人の日記を寫す人を見るに、
往々にしてついたりつけなんだりすることがある。又始めはよく勤めて
も、繼いで惰れたり、しまひには廢止して寫さなかつたりすることもあ
る。是れを常の心がないと云ふのじゃ、詩經に曰ふ、誰れも初めをよく
勤めぬものはない、たゞ終はりまで、よく之れを爲し遂げるものはない

と、論語に曰ふ、人にして恒の心がなくては、以て巫醫の如きものでさへも、なることは出来ぬものじやと、之れを戒めなくてはならぬ、之れを戒めなくてはならぬ。

第五十課 電報

蔣 維 喬

○郵政制度、○急遽之事る出来事、○遅緩たりして居る、○通都なる都會、○木桿の立てる、○鐵綫りがれ、○疾徐さして居るとの意、○印成來あがる、○點線をつけた、ひとすぢの線を云ふ、○俄頃と云ふ心、○阻隔だてらるゝ、○機事ことがら、○漏泄れる、○外人其の事以外の人と云ふ心。

(124)

講義 郵便制度は、至りて便利のよいものである、されど急遽なる事柄は、又其の遲滯寛緩なるをおそれる、是に於いて電報と云ふものがある、其の法は、通都大邑において、あまねく電報局を設置し、各局相距るの地、五六丈を隔て、木のはしらを立て、鐵製のはりがねを其の上に置き、以て電氣をそれに通ずるのである、是れを電線と云ふのじや、局中におのゝ電機を置くのじや、機に二種の別がある、一を發信機と云ひ、二を受信機と云ふ、信を發するものは、手を以て機を按じて之れを動かすのじや、そうすれば其の機の動く疾徐に因りて、受信機に聯なる所の筆が、自からよく點線を印成して、以て文字に代ふるじや。

(125)

電報でんぱうがありてより、遠遠れんげんの地ちよりの音信いんしんは俄頃がげんにして達たつするやうになつた、其その洋海やうかいに阻隔そかくせらるゝものは、電線でんせんを水底すいだいに沈しづめて、以もつて之これを通つうずるやうにした、機事きじの外ほかに漏もるゝことを恐おそるゝものは、あらかじめ暗號あんごうをこしらへおきて、以もつて外人がいじんの窺うかがひ知しることを防ふせぐやうにする、

第五十一課 電話

蔣 維 喬

(126)

○傳達でんたつとどけて、○對語たいご自若じじやくとの自由じゆう自在ざいになりて、相語さうごるゝ云ふ心、○分糸ぶんしつなぐ、○兩竹筒りやうちくとう竹ちくづつ、○細語さいごことば

人ひとの言語げんごの、輕かろきものは五六尺しよくとちやくの所ところに達たつするばかりじや、重おもきも

のも、五六尺ちやうたつに達たつするに過すぎぬ、五六丈さやうたい以外の所ところへは、如何いかに苦心くしんしても聞きかせることが出来でぬ、電話でんわと云いふものがありてより、相去さうこることが千里せんりの遠とほさに及およぶも、其その言語げんごの達たつされぬ所ところはない、電話でんわの製せいは、ほど電報でんぱうのやうじや、そうして受語じゆごと送語そうごの二ツの機械きかを以もつて、聲音せいんを傳達でんたつするのじや、故ゆゑに隔へたつる所ところが遠とほくても、さしむかいて相あひかたることが、自由じゆう自在ざいである、孰いづれかこれより便利べんりなものがあるであらうぞ、幼稚ちゆうしなる童兒どうじが、嘗かつて五六丈ちやうたつもある線せんを以もつて、其その端はしを兩ふたツの竹筒ちくとうに分わけてつなぎ、それによりて以もつて、細語さいごを傳つたへたものがあつた、其その道理だうりは、電話でんわと同じである、たゞ材料ざいりやうを選えらぶことが精細せいさいならざりしと、又電

(127)

氣を用ゆることを知らざりしとのため、未だ以て遠きに及ぶに足らなかつたのじや、されど其の理について之れを推し究はむるときは電話の製に於いても、思ひ半ばに過ぐることはないか、

第五十二課

電信

練習用につき
解を附せず、

第五十三課

勤儉

杜 亞 泉

○謀生之道の道と云ふ心、○勤儉勤勉と、○求ニ飽暖一きることを求むると云ふ心、○不
求ニ甘美一しきものとを求めぬ、○不測災厄にかゝる不幸、又は、○卑賤無恥之事しく

してはづることのなき所爲を云ふ、○奔走之乞丐居るこじき、

講義 天が既に人間を生出させた、だから人間は即ち當さに自から其の生活を謀かるの道を盡くすべきである、生活を謀かるの道は、外でもない、勤勉と儉約を守るばかりじや、何をか勤と謂ふかと云へば、朝早く起き、夜おそく眠むり、煩劇を厭はず、勞苦を憚からず、事の須らく一日に爲し終はるべきものは、必ず一日を以て之れを爲し終はるのじや、何をか儉と謂ふかと云ふに、衣服飲食は、たゞ飽暖を求めて、甘美を求めず、入る所の財は、常に少許づゝを留めおきて、以て不測の災厄を豫防するのじや、夫れ儉約でなければ、妄りに費してならぬ、又勤勉なら

ざれば収入がすくない、収入がすくなくして、妄りに費消すれば、財物が匱しくなる、財物が匱しくなれば、必らず卑賤にして恥も外聞も思はず、凶事をするものじや、今日道土にかけまはつて居る乞丐は、皆勤めもせず、儉約もせざる人々である、どうして警めずにおかれやうや、

第五十四課 格言 三則

○以約失之者鮮矣、夫て失敗するものは、すくなくものじやと云ふ心、○倉廩實而知禮節、衣食足而知榮辱、米ぐらや金ぐらが充實してくると云ふと、禮節を教へなく充分に満足してくると云ふと、光榮に恥辱と云ふことを知つてくる、○守約而施博者善道也、あるものに、施與する所の

のひろきものは、之れを善道と言はなくてはならぬの意、

第五十五課

尺絲寧忍委塵土

名賢言行錄

○席間からず、古老雜話には、居室とあれば、居室らしく譯したし、○唐絲時は、我が邦に生絲なく、悉く支那より輸入を招げり、故に生絲を唐絲と云へり、○侍臣家臣を云ふ、○荷囊巾着の二字にあたらず、○刀鞘條首のひものさき、○織齋しむと云ふ心、○忠實誠實じや、○唐商を云ふ、○質遷へる、○崎港を云ふ、○轉販してひさぐ、○斷絲いと、○天物のなりとの心、○塵土どろ、○委棄するを云ふ、○姍笑は、あざけると訓ず、○好笑人の笑いをうけたのは

このましき笑
いなりとの心、

講義 士井利勝は、嘗て其の居間に、唐絲の一尺ばかりなるもの棄て、あるを見、侍臣を呼ばれた、大野仁兵衛と云ふもの、たましく當直部屋に居たので、聲に應じて利勝の旁らにくると、利勝曰ふ、此の品を、汝にたのみちく、善く之れを貯藏しおけと、大野は受け納めて退出した、左右のもの共は竊かに之れを笑ひあつて居た、三年の月日を経て後、利勝は大野に唐絲の所在を問ふた、大野は即ちこれを荷囊より取り出し、以て利勝に進めた、利勝は之れを受け取り、刀の鞘の、ひものささの解けたる所を結びつけ、而して後家老職寺田與左衛門を召し、之れに示し

て曰ふ、往年此の絲の坐間にあるを見、仁兵衛に屬して之れを貯藏せしめおきしに、左右のもの共は、皆我がすこしばかりの物を惜しむを笑ふて居た、而るに仁兵衛はかへつてよく謹んで之れを所藏しおき、嘗て之れを紛失せしめなんだ、實に忠實なることあまりありと云ふべきである、宜しく祿三百石を與へて、其の心がけを賞すべきである、そもく此の絲は、乃ち唐山の人民共の、蠶を飼ひて製出したものじや、そうして唐國の商人共が、貿易して遷つし來り、それから海に航して長崎港に入り、長崎の商人は又、京都攝津の間に轉販し、然る後江戸に入るのである、其の人力を費せることは、其の通りであるから、一尺の切ればし絲であ

るからとて、亦天與の物であるから、どうして之れを棄て、塵土に委するに忍びやうや、今之れを取りて條首を結びつけたれば、其の用ゆる所を廢せぬものと言ふべきである、是れも亦天に事ゆる所以の一ツである、たゞし予の之れを仁兵衛に委託した時、侍臣のために姍笑されたが、今又三百石を以て之れを買ひ受けた、亦好い笑いかたではないか、

第五十六課 舟車

蔣 維 喬

○疲極矣と云ふ心、○阻焉られる、○迅速なるを云ふ、○交通ゆきする、○轉運つこぶ、○行旅之往來にゆきする、○届る到着す

一人の力を以て、百斤の重さある物を負ひ、日に行くこと五六十里すれば、疲勞極まるものじや、且つ大きな山、巨きな河にあへば、又それにさまたげられる、是に於いて車を制して以て陸を行き、舟を制して以て水を行くのじや、そうしてそこで始めて交通が便利になるのだ、蒸汽の理が既に明らかになつてより、水上には汽船があるし、陸上には汽車があるやうになつて、其の運行の迅速なることは、之れを尋常の舟車に比較すれば、殆んど五六十倍にしても未だ止まぬ程じや、今日亞細亞、亞弗利加、歐羅巴、南北亞米利加の五大洲が、互いに交通してからに、商務の日に盛かんになり、貨物の轉運や、行旅の往來の遠しとして

至らざる所なきは、汽車汽船の功に由りていある、若し世に汽車汽船がなかつたならば、どうしてよく此くの如き効果を見ることが出来やうや、

第五十七課

指南針

莊

愈

○示ニ四方一めせりと心の心、○沿用がつて使用した、○曠野原野の意、○至便なき便利、
○外廓まはり、○旋轉つりあるく、○重洋外洋と云ふ心ならん、

昔時黄帝が、蚩尤と戦争した時。軍士は迷ふて道を失ふた、すると黄帝は、指南針と云ふものを作り、以て四方の方向を示めした、五六千以來、常に之れを沿用して居る、凡そ深山曠野の中を行きて、東西

南北を辨せざる時は、此の器の力をかりて、以て方向を定むる、至便此の上なきものじや、其のこしらへ方は、外廓は圓くして、中に一つの孔がありて、一つのちいさき柱を立て、指南針をば横さまに、其の柱の上に置き、よく四方面に自由に旋轉せしむるやうにして置く、其の針の止まりた時は、一端は常に北方に向ひ、一端は常に南方に向つて居る、強ひて之れをして他方面に向はせやうとしても、出来ぬのである、此の器が傳はりて歐洲に入りてから、航海の術が遂に益々發達して、今日のやうになつたのである、今日遠く大洋を涉りて、道を失ふて方向をあやまるやうな心配のなきものは、實に指南針の力であるのじや、

第五十八課

支那疆域

蔣

維

喬

○寒燠あつさ、○土壤膏腴て、こえて居る、○貫注そくぐ、○富庶之區なるとみてさか

○礦産豊富かにとんで居る、○莫大之利源どの、一大利益の源泉なりと云ふ心、○鮮

少く極々す、○發源之處所なりとの心、○叢沓あつまる、

講義

支那は、亞細亞洲の東南に居りて、縦は五千四百里で、横は八千八百里ある、全地球の陸地の、十分の一を占めて居る、西北は、西比利亞に界し、西南は、印度等の國々に界し、南は、安南、緬甸に接し、東は、海をへだて、日本と鄰りをなして居る、朝鮮の一邦は、東北の隅

の所にある、

本部を、十八行省に分け、さむさもあつさも、よろしきに適して、土地はあぶらこくてこえて居る、黄河、長江、西江の三大水は、其の間を貫通して海に注ぎ、實に環球中の最も富庶の區である、本部の東北を滿洲と云ふ、分けて五省としてある、氣候はやゝ寒冷である、そして森林が多く、畜牧がさかに行はれて、特に礦物の産出が豊富で、尤も莫大なる所の一大利源をなして居る、蒙古は、本部の北に在り、土地に沙漠が多く、物産は實に鮮少じや、青海は、其の西にあるが、中に高山や太湖が多く、黄河や長江の發源地となりて居る、青海の西南を西藏と云ふ、

萬山ばんざんひらがりあつまり、地勢ちせいがひとり特別とくべつに高い、其そのの西北せいほくを新疆しんぎやうと云ふ、近頃ちかごろ改めて行省かうしやうを設けたけれども、しかし土地とちがひなしく、人烟じんえんが稀少きせうで、本部ほんぶと到底とうてい比較ひかくすることが出来ぬ、

第五十九課

患難痛苦

中村正直

○患難くわんなん心配しんぱいてむづかし、○痛苦つうくいたくして、○顯貴けんき顯榮けんえいにして、○側陋そくろうしき人を云ふ、○尋常じんじやう之人のひと、○憂愁いうしゆうなしむ、○憤懣ふんまんもだゆる、○指身さくみ無地なしちしても、土地とちのおくべき所ところが、○光榮くわうえい之用のようの用具ようぐとの心こころ、○聖用せいようちゆる、○精靈せいれい之福のふくの幸福しきふとの心こころ、○嶮巖けんがんあやうき貌まう、○崎嶇ききうみれなり、故ゆゑに崎嶇ききうたるを云ひ、嶮は、○粗惡そあく不毛ふもう惡にくに

て、草木くさくの生なまぜざる、○沃壤よくじやうよき土地とち、○散布さんぷらす、○活水くわつすゐなる清水しみず、

○人ひとの此こゝの世よの中なかにあるや、患難痛苦くわんなんつうくは、其そのの襲おそひ來きたること、矢やよ

りも疾はやくある、光榮くわうえいある顯貴けんきの人ひとも、側陋そくろうなる貧乏ひんぱふ人ひとも、均ひとしく皆免みなまぬかれぬ所ところである、尋常じんじやうの人ひとが之これにあへば、憂愁憤懣いうしゆうふんまんして、其そのの身みをあくに土地とちのないやうに騒さわいで居ゐる、たゞ善人ぜんじんばかりは、之これをして轉てんじて、光榮くわうえい之用のようとならしむるのだ、故ゆゑに善人ぜんじんは、禍わざはひを視みること福ふくの如ごとく、苦くを以もつて樂たのしみとして居ゐるのだ、

患難痛苦くわんなんつうくは、身體しんたいの幸福しきふなものではない、之これをよく用もちゆれば、精靈せいれいの福ふくとなる、特墨士留斯ていぼくしりゅうすい曰いふ、人ひとの不幸ふしやうは、未いまだ嘗かつて、患難痛苦くわんなんつうくの事ことを知し

らざるより、大なるものはないと。

患難將くわんなんまさに至いたらんとするの時に當りては、決して豫あらかじめ先まづ憂い愁しうしてはな
らぬ、蓋けだし人世じんせいの患難くわんなんは、遠とほくから之これを望のぞめば、猶なほほ巉巖崎嶇せんがんききくの如ごとく、
粗惡不毛そあくふもうの地の如ごとくである、之これに近ちかづくに及および、其その上に沃壤よくじやうありて、
各所かくしよに散布さんぷし、亦活水の流ながれ出いづるものあるを見るであらう、

第六十課 忍耐

杜 亞 泉

○困窮こんきう窮難きうなんと
○屈辱くつじやくや、身みのかどみて伸のびびぬやうなこと
○怨尤えんいうをとがむるの意、○怡然いぜん
居まる貌、○區く々くりと云いふ心、

講義 困窮屈辱は、共に人の惡む所である、不幸にして此れに出遇ふた

ならば、たゞ忍耐してからに、之れをやり過すばかりである、況んや今
世の人は、其の困難も屈辱も、半分は自から取るに於いておやである、
蓋し既に生を謀かるの才もなく、世に處するの道もなければ、どうして
得て困窮せざらん。どうして得て屈辱せざらんや、乃ち自から身を
怨らみ、自から身を尤めずして、反つて天を怨み人を尤めて居る、豈に
笑ふべきの甚だしきではないか、若し自から取りし譯でもないのに、困
窮屈辱が来たならば、此の困窮屈辱と云ふものは、固より人の免るゝこ
との出来ぬ所で、忍耐を捨てゝは、別に他の方法はなく、人を尤め天を

怨みても、何等の益なきことであると云ふことを見るであらう。試みに考へて見よ、孔子は大聖大徳ではないか、それでも尚ほ園みを匡人から受け、糧食を陳人に絶れたではないか、何等の困窮であるぞ、何等の屈辱であるぞ、而かも孔子は怡然として之れを忍ばれたではないか、孔子に比らべて見たならば、吾が輩は何の徳があるか、何の才があるか、乃ち此の區々たる困窮と屈辱を、忍びこらへることの出来ぬ法やあるのである。

第六十一課

蘇武持節

李

瀚

○單于 匈奴の王は、王と言はずに、單于と稱せり。○大窖 中な大きな土あ。○旃毛物の名。○羝 羊の牡を云ふ。○乳 兒をうむ。○漢節 漢王からさづかつた、符節のことなり古は外國臥起操持れを手にもちて離さぬ。○和親 和親したくする。○帛書 たる書類。○強壯 四十をひ、三十を壯と云ふ、年わか。○鬚髮 みの毛も、か。○著節 老臣 老年の家臣との心。○朔望 朔は一日を云ひ、望は十五日を云ふ。○圖畫 かくを云ふ。○形貌 容貌。

前漢の蘇武は、字を子卿と云ひて、杜陵の人である、漢の武帝の時、中郎將と云ふ官名を以て、節を持して匈奴に使者に行つた、所が匈奴の單于が、蘇武に是非降服させやうと思ひ、いろ／＼に勧誘するけれどもきかぬ、そこで武をとらへて大きな土穴の中に置き、絶へて飲食

せしめぬのじや。時に天雪をふらした、蘇武は臥しながら雪と旃毛をかみあはせて、之れを咽みくだし、五六日死なずに居た、匈奴は之れを以て神さまとなし、乃ち武を北海のほとりの、人なき所に徙つし、羊の牡を牧養させ、言つて曰ふ、此の牡羊が兒を生んだなら乃ち歸國させてやらうと、武は漢帝から授けられし節を杖つき、羊を牧ふて居たが、寝るときも起きる時も、此の節を手を持ち、しばしといへどす離すことをせぬ、だから節の旄は、盡く落ちてしまつた、昭帝が立つて、匈奴は漢と和睦して、親密となつた、漢では蘇武等をかへしてくれよと求めた、匈奴は詭はりて言ふ、蘇武は死せりと、常惠と云ふもの、漢の使者に教

へて言ふ、天子が、上林中で射て以て、一羽の鴈を得られた、其の足に帛書がしばりつけてあつて言ふ、蘇武は、某の澤中にありと、是に由りて漢に還へることを得、拜せられて典屬國となられ、秩は中二千石で、錢二百萬に、公田は二頃に、宅は一區を賜はれた、武は匈奴に留まること十九年で、始め強壯を以て使者に出てたのであるが、還へるに及んで、鬚髪は盡くまつしろであつた、宣帝の時に至り、武は節をあらはせる老臣なるを以て、月の朔望に入朝せしめ、號して祭酒と稱した、年八十餘になりて卒した、後に麒麟閣上に圖書して、其の形貌に法とられ、其の官爵姓名を署された、

第六十二課 猴

莊

齋

○靈巧に比較して言ひたるものにあらず、而るに之れに靈の字を使用せしは何の意歟、○衆飼養す、○戯劇せるを云ふ、○歡樂たのしみ、○販夫物をつりあ、○熟睡する、○狂呼になりてよぶ、○跳踉どつたりする、○憤々甚だしきこと、○數武武便歩に同じ、を云ふ、數武は、五、六あゆみするを云ふ、○回顧くわいこふりむき、てみる、

講義 猴の形状は、人に類似して居る、そらして性質は靈巧である、好んで人の爲す所に效ふ、猴をやしたふものは、敢へて之れを馴らし、よく戯劇をなさしめ、以て人の歡樂を博して居る、昔時物を販賣するもの

がありて、帽五六十具をたづさへ、行きて或る山中を經た、寒ること甚だしいので、樹下に休息し、帽を取りてかしらに戴き、覺えずして其のまま熟睡してしまつた、さむるに及びてあたりを見れば、蟬は盡く失せてない、仰いて樹上を見れば、猿猴は數へきれぬ程ありて、皆帽を首に戴いて居る、販夫はさちかひの如くになりて呼ぶけれども、猿共も亦跳踉して止まぬのじや、販夫は怒ること甚だしく、戴く所の帽口を取り、地上になげうちて曰ふ、汝が輩、なんぞ之れをも拜せて取りまらざるぞ、憤々と怒りて前み行き、未だ數歩ならざるに、樹上をふりむき見れば、群猴も亦帽を地上になげうつてしまつた、蓋し其の爲す所にまねたので

ある、遂に立ちかへりて之れを取りあげ、其の一をも失はかつたと云ふ
ことぢや、

第六十三課

傳書鴿

清國國文教科書

○戀レ舊しんじゆをしたふの所、○遠行えんかうへ行く、○紀律きりつ嚴明げんめいしてあきらかである、○案視あんしてみる、
○闕けつしづかなる諫けん、又、○點視てんししてしらべて視るを云ふ、○愕然おつぜんく貌、○頃刻けいこくしての意、○戈か
甲煥かきくわん 燦さんあざやかでうつくしい、○旗幟きせい精明せいめいはたさしものが、精巧せいこう
が、へだち、○消息せうそくやうすふり、○綜計そうけいしてはかりに

講義 鴿なつの性質せいしつは、もとの所ところを戀しんふて居る、遠く行きて、五六百里ごはくひゃくりもあ

る所へ行つても、未だ嘗つて其のもとの巢すに歸かへらぬことはない、故ゆゑに
世間よけんの人は多く之れを畜かひ、或はよりて以て書しよを傳つたふるの用に供きやうして居
る、

宋その曲端きよくたんと云ふ人は、軍いくさを治をさむるに、紀律きりつの嚴明げんめいな人であつた、張浚ちやうしゆん
が嘗かつの其の陣營ちんえいを案視あんしせしに、闕けつとして一人も居ゐないのじや、浚しゆんは之れ
をあやしみ、之れに謂いつて曰ふ、吾われ點視てんしせんと欲ほつして來れりと、端たんは所
部の軍隊ぐんたい五軍ごぐんの軍籍ぐんせきを以て、張浚ちやうしゆんに進すすみた、浚しゆんは端たんに命めいじて、其の一部いぶ
を點てんせしめた、端たんは庭園ていゑんの間に於おいて、一ツの籠かごをひらき、一羽いちぶの鴿はとを
はなちて去さらしめた、而しかるに點てんせんとする所の軍は、鴿はとの去るに隨したがひて

來會した、浚はそれがために、愕然とちどろいた。既にして盡く之れを
觀んとした、是に於いて悉く餘の鶴をはなち去らせしに、各軍は頃刻に
して集會した、戈甲のひかり熾燦として、旗幟は甚だ精明である、
四十年前普國の師が、法國を攻めてからに、法國の首府巴黎を取り圍む
こと、甚だ急であつた、それがために内外隔絶して、事情が更らに不
明であつた、法區人は鶴を用ゐて書を傳へ、以て城内の消息を城外の
人々に通じたことがあつた、圍みの解けた後に及び、鶴の傳へし所の書
を綜計せしに、凡そ百餘萬の大多數に及びしと云ふことじや、

第六十四課

勸孝

莊

俞

○成立せいりつ立つて一人前ひとまへ、○懷胎くわいたい胎のなほ、○自立じりつ之基もとひとり立つて、世の中をわ
らうを内室うちむろをめぐりて、○損友そんゆう交際して、損のある友を云ふ、惡人を友とし、愚者を友と
室むろ妻つまをもらふを云ふ、○損友そんゆう交際して、損のある友を云ふ、惡人を友とし、愚者を友と
懸揣けんすい程ほどをはかる、○衰老さいろうとらふを云ふ、○奉養ほうやう父母ふぼを養ふ、○口體こうたい之養やうの養やうひにて、
衣服飲食いふくおんじに重き、○干犯かんはん違反いはんするを云ふ、○法紀はふき法律はふり綱きよう、○貽いのこす
をわくを云ふ、○干犯かんはん違反いはんするを云ふ、○法紀はふき法律はふり綱きよう、○貽いのこす

世界せかいの人類じんるふは、貴賤きせんとなく、智愚ちぐとなく、試みに一人をどらへて之
れに詢とふて曰いふ、汝なんぢは何なにを以もつて、汝なんぢの身體しんたいあることを得えしと、則すなはち曰いふ、
父母ふぼの生うめる所ところなりと、答こたへぬものはないであらう、又試またみに之これに詢と

ふて曰ふ、汝は此の身體を有して、何を以て能く斯くの如く成立せしと、
則ち曰ふ、父母の養へる所なりと、答へぬものはないであらう、して見
れば、父母の我等に對する恩意は、果して如何であるか、

未だ生れざるの時、母の胎内にあること十ヶ月である。此の間の母の苦
しみは、如何であらう、そうして母の苦しみは、實に此れより始まるの
である、既に生るれば、父母は之れをふところに入れ、又之れを抱き、
艱難辛苦して、更らに晝夜を厭はぬ、やゝ成長すれば、之れがために師
を擇び、出て、學に就かしむる、是れ他日自立の基と爲すためである、
其の成人となるに及んでは、之れがために室を娶る、其の交際する友を

見ては、心配して曰く、損友に交はることがないであらうか、よく禍患
に遭はぬであらうかと、未だ見たのではないけれども、常におしはかり
見て之れを心配して居る、凡そ父母が一生の營む所は、おほむね其の子
のためでないものはない、

父母の恩は此のやうじや、以て報答を言へば、殆んど人力のよく及ぶ所
ではない、されど力の及ぶ所は、どうしても盡くさなくてはならぬ、
子の幼なるや、自から其の身を養ふことは出来ぬ、故に父母は之れを養
ふのじや、子の成立するに及びて、父母或は衰老して、自から其の身を
養ふこと能はずんば、子は以て父母を奉養せずして可ならんや、奉養の

道は、貴賤貧富に由りて、相同じきことは出来ぬけれども、要は當さに
おの／＼其の分限に應じて、之れを奉養しなくてはならぬ、決して吝し
む所ありてはならぬ、然りといへども僅かに口體のやしないのみをつく
して、以て其の心をば安んずることなくんば、仍ほ不孝たるを免れぬの
じや、故に父母の命は、萬々止むことを得ざるにあらざれば、慎しんで
之れに違背してはならぬ、若し夫れ國の法律紀綱を干犯して、其の身を
辱がしめたり、其の家を危くしたりして、父母の心配をのこして、父母
の名をわづらはすことなどあらば、是れ不孝の尤もなるものである、

第六十五課 阿兒摸刺的二子 依田百川

○一豪富がれもち ○肥美つくしとの煮 ○佳菓だもの、○飛棟樹木の上に見ゆるを
云、○朱欄てすり、○器什物、○精良よきうつわ、○美哉 田園田圃やの心、又うる
はしきかな此の田 ○辛苦るしみにあふを云ふ、○經營とふむ、○不和せぬ、○爭端ら
そひの ○憂慮んばかる、○遺書を云ふ、○裁決さめる、○法官を云ふ、○呈げる、○
酷似て居る、○釐毫しばかりと云ふ心、○星斗云ふ、○腫子み、○跪謝おわびする、
○爛者ひかるもの、○眷我つくしむ、○額い、○遺産の財産、○至性れつき、○
一家輯睦らきてむつまじとの心、

講義 亞拉比亞に國に、ひとりのおほがねもちがあつて、「アルモラット」と曰ふた、二人の子を生んだ、田宅が肥れて美しく、又佳果數百種あるが、屋を其の中に建て、飛棟は大空に聳へ、朱欄は日光にうつりあひ、器具什物に至るまで、精良ならざるものはない、一日檻によりて眺望し、歎息して曰ふ、美なる哉田園や、辛苦經營して以て、之れを二子に傳へんと欲すれども、二子は和合せずして、日に中あしくなるばかりじや、若し鄰をならべて住居せしめたならば、必らず争端をひらきて、終に他人の所有となるであらうと、因りて憂慮して病をなし、遂に大患におちいり、正さに歿せんとするに臨み、遺言して曰ふ、吾が子た

るに堪ゆるもの、ひとり之れを取れ、財産を分つことを許さず、其の裁決の如きは、裁判官に問へと、遂に死んでしまつた、兄弟は官に訴へ出た、長子は父の像を呈して曰ふ、兄弟は孰れかよく父に肖たるものぞと、役人は二人に命じて、庭上に立たしめて之れを見るに、二人共ならびに酷似して居る、而して其わづかばかりの相違せる所を論ずれば、兄弟共互いに似た所もあれば、似ざる所もある、役人は之れを裁決することは出来ぬ、そこで問ふて曰ふ、汝等は、何にか能くする所があるかと、二子答へて曰ふ、弓を射ることを善くせりと、長子又曰ふ、夜分に飛べる鳥を射て、中らざることなしと、季子又曰ふ、箭をして天に至らしめ、

星斗といへども射ておとさんと、法吏はそこで二子をして、射術を比較せしめた、そうして父の像をかけて的となし、命じておのゝ其の腫子を射らしめた、兄は先づ之れを射て、其の腫子にあてた、弟は弓をなげうち、ひざまづき謝して曰ふ、彼の爛々たる腫子は、嘗て我をかへりみ、我を眷した目である、我は心に忘るる暇はない、どうして之れを射るに忍びんやと、兄は喜べる色があつた、法吏は起ちて弟の手を執り、之れを扶けおこし、其の額をなで、曰ふ、汝は眞に「アルモ」氏の子である、父を愛すること、財を愛する情にまされり、是れ孝子であると、因りて悉く其の遺産を付與した、弟は素より至性があつた、産を分けて兄に

與へ、一家輯睦してからに、訴訟沙汰は中止してまつた、

第六十六課 七歩之才

世 説

○魏文帝に即いて文帝と云へり、○行ニ大法一大法に行ふと云ふ、○煮レ豆燃ニ豆箕一豆を煮やうとして、豆からをもやし、○豆在ニ釜中一泣泣いて居る、是れ自分を煮るに物もあてたきいとなし、以て豆を煮て居る、○本是 同レ根 生 豆からからして、生れ出たのである、らうに、自分を生んだ豆からを、○相煎 何 太 急 との急劇な譯であらうと、文帝弟の文才を思ひ、之れを殺さんとせり、故に曹植は此れを作りて、○釋レ之 たと云ふ意、以て、文帝を諷刺したのである、○釋レ之 たと云ふ意、

第六十七課

蛇足

史

記

○楚使使者、○一卮酒ツのさげ、○蛇無足と云ふものには、

陳軫が、楚國の使者昭陽君を見て曰く、ある人が、舍人に一卮の

酒をおくるものがあつた、舍人共は相謂つて曰ふ、請ふ地にゑがいて蛇

をつくり、先づ成るものひとり飲まんと、一人の舍人先づ成り、酒をあ

げて起ちあがりて曰ふ、吾よく之れが足をつくらんと、足をつくるに及

び、後れて成れる人酒を奪ひ飲みて曰ふ、蛇には足がない、今之れをつ

くるときは蛇でなくなると。

第六十八課

稻葉一徹

大槻清崇

○服従まじり不く、○末いまだ釋はな然ら、○若めい燕まつの會あひ、○託たく伴はん接せつ一いっすると云ふに

かこ、○從容じゆうようてせまらぬ、○朗誦ろうそうをらよみする、○雲くも横よこ秦しん嶺りやう一家いっか安あん在ざい、

○雪ゆき擁よう藍らん關かん一いっ馬ば不ふ前ぜん關かんのあたりまで、

○一いち々じつ分ぶん解かいときかせる、○傾かたむ聽きけてき、

○徒と死し云いふ、俗しやくに云いふ、

○猜あや疑まそれむ、○七しち首しゆ寸すん五ご分ぶんと云ふ、

○忽とつ然ぜんと云ふ心こころ、

○稻葉伊豫守一徹は、既に織田氏に服従した、而るに信長の意は、

まだ打ちどけぬ所がある、そこで茶の湯の會を設けて、之れを茶室に引き入れ、竊かに其の家臣三人をして、接伴役に託し、以て之れを殺すことをはからしめた、一徹は從容として室内に入り、壁間にかけてある所の詩を、朗々とそらんじて曰ふ、雲は秦嶺に横はりて家安くんがある、雪は藍關を擁して馬前まずと、三人のものは、一徹に就いて其の意義を問ふた、すると一徹は一々に分解して説き聞かせ、あはせて其の古典までを説き去ること、甚だ詳密であつた、信長は壁を隔てて傾聴して居たが、忽然と走り出て、一徹に謂つて曰ふ、我は初め、汝を一武勇の男子とのみ思ふて居た、今乃ち其の文學あること、此くの如きを知りては、

猜疑の心も頓に消滅してしまつたと、一徹は頓首して其の知己に感謝した、是に於いて三人に命じ、各々匕首を懐中より取り出させ、以て一徹に示めした、一徹も亦袖のうちより、一刀を取り出し、笑ひて三人に謂つて曰ふ、今日の事は、僕も亦從死せざらんことを期して居たと、

第六十九課

萬物無増減

博物新篇

○開關のひらけはひらくる意にて、世無増減一することみなしとの意、○凝爲水雲が冷氣にあへばこ潤下ゆくを云ふ、○源泉混々心混々とは、水のさかんに流るゝ貌、
○滄海大海のことを云ふ、○重洋さなる意に解せよ、○升降循環たり、ぐるぐるとめ

ぐりて止まぬと云ふ心。○古今絡繹ここんらくたくり來たりして止まぬと云ふ心。○虧損こせんふこともと云ふ心。○涓滴けんてき之微のひなる水をもとの心。○森々せいせい者大水の貌。○類推るいすい類を以て

講義 世の中の開ひけ始めてより以來いらいにさかのばりて尋ねれば、世界の萬物ばんぶつは均ひとしく増加ぞうかして居るものも、滅損めつそんして居るものもない、即ち江海こんかいの水みづの如ごときも、日にむさるれば汽きとなり雲くもとなり、冷氣れいきに遇あへば雨あめとなり露つゆとなる、雨あめや露つゆからして復た凝こりて水みづとなるのだ、水の性質せいしつは潤下じゆんげすることを好このむ、それが土つちに入りて後積のちつみり積つみりて泉いづみとなり、源泉げんせん混々こんこんとして流ながれて止やまず、江こいよりして滄海そうかいに達たつし、海うみよりして重洋じゆうやうに出いづる、それから斯かく升降せうかう循環じゆんかんするけれども、曾かつて大地たいちの外ほかに出いてたり、又また離はなれ

たりすることはない、古今ここんとも絡繹らくたくとして循環じゆんかんするも、何なににも涓滴けんてきの微みをも虧損こせんする道理たうりがない、森々せいせいたるものにして是かくの如ごとくである、其その他のものも、すべて類推るいすいすることが出来るものじや、

第七十課 露

杜 亞 泉

○夏天かてん晨起しんきはやくおきる、○石塊せきくわいちくれを云ふ、○水みづ點てんて居るを云ふ、○降落かうらく者ものくだりおち、○冷而れいめんるおち、○凝こ結けつむすぶ、○呵か氣きをかける、○凝こ成せいをつくりなすを云ふ、○晚間ばんかんれあい、○發散はつさん散さんして散さん、○冷濕れいしつ氣きて居る氣きと云ふ心、○點てん々たんたん、○露ろ珠しゆたま、○遮護しゃごまもる、○吹盪すいたうすを云ふ、

夏日天氣のよい日に、あさはやく起されば、いつも草木の枝葉や、石塊などの面上に、水點の滴々として居るを見るであらう、是れを名づけて露と云ふのだ、或は謂ふ、露は空中より降落するものじやと、其實はそくてないのじや、露は乃ち濕氣の冷却せる面上に遇ひ、凝結して出來あがりしものである、試みに口を以て、玻璃面に向ひていきさを吹きかすれば、即ち水點ありて凝成せるを見るであらう、地面に於ける露も、亦此の道理と同一である、蓋し地面に收むる所の太陽の熱が、日のくれあいには發散すること、甚だ迅速なものである、しかして冷濕の氣が之れに遇へば、即ち水點となりて、點々相合併して露珠となるのだ、草木

の枚葉は、熱を發散することが尤も迅速じや、だから露を成すことがやゝ多い、たゞ夜分に雲ありて、遮護したり或は大風がありて吹きさうごかせば、露が少なく、或は露を成すことの能はざることもある、

第七十一課 奇異植物

莊 愈

○有_二知覺_一物を知りたり、痛痒を、○蚊蠅之屬たぐい、○盡消しまふの意、○奇矣と云ふ心、

動物には知覺がある、而して會物には知覺がない、されど植物の知覺にも、或は動物に類似して居るものもある、手を以て合蓋草にふれ

るときは、其の葉が遂に縮みてしまい、枝も亦垂れ下りてしまふ、此れ吾人の常に見る所である、又謂ゆる捕蟲草と云ふものもある、葉の上に毛がある、毛の中に液がある、蚊蠅のたぐいがたま／＼其の毛にふるれば、巻いて之れを食ひ、久しきをつみて盡く消滅させること、食物の胃に於けると一般じゃ、或はちいさきものはしの牛肉を以て之れに投入すれば、其の食はるゝことちようど蚊蠅と一様である、ア、亦ふしぎなことである、

第七十二課 漆

清國國文教科書

○樹膠やに、○竹管くだ、○汚垢朽腐之患、ちてくさるを云ふ、患は、心配と云ふに同じ、○采繪 繪畫を云ふ、○炫 目を眩惑さするとて、○野生 自然にはい、○粉屑やくづ、○採取れる、○混入 入りこむ、○渣滓 云ふ、○漆品 品質、○行銷 と云ふ心、

講義 漆は樹木の膠である、其の樹の高さは二三丈ある、山谷の中に生じて居て、六七月の間に、其の樹の皮を割き、それに接するに竹の管を以てして、其の膠を取るのだ、そうしてそれを以て、器具などを髹木れば、汚垢朽腐の心配を免ることが出来る、若し之れに采繪を加ふれば、其の美麗なること目を眩惑さするばかりじゃ、世人は尤も之れを喜んで居る、

陝西、四川の兩省は、漆を産出することが最も豊富で、其の品は亦最も良質じや、されど野生の老樹が多い、樹が老ゆれば、皮にこまかな屑が生じてくる、それを取り込む時に、漆の中に混入するので、遂に渣滓が多く、實用に適せぬやうになる、其の狡猾なるものは、或はまじゆるに沙糖、桐油などを以てするものもある、漆の品質が日に下りて、販賣の道も亦日に滞りてくる、

第七十三課

藝菊

清國國文教科書

○花癩叢生がりて生出する、○培養やしなふて、○新畦あたらし、○移植うへる、○養

液草木をやしない、○細竹たけ、○傾折おれる、○錦繡はくせるもの、○絢爛にてうつくしく、

菊の種類は最も多くて、四時皆菊の無いことはない、されど秋日に花をひらくものを以て、貴しとして居るのだ、菊花の形は、外の花と異なり、はなびらがむらがりて生出し、其の數常に百を以てはかる程ある、其の生長方は甚だ容易で、其の莖をつまみ取りて、土中にさしておけば、活さぬものはない、されど美花を得んと欲するときは、其の培養方を謹まねばならぬ、

菊を植へつくる法は、花の萎める後に當り、其の莖を刈り取り、其の根

をば土中に埋めて、霜雪にあてるを避けさせねばならぬ、そうして別に
あたらしきあせをつくり、多く肥料を加へ、春に及びて、根から自然に
芽をふさだしたならば、肥土に移つし植えて、毎株相へだつること、一
尺ばかりし、葉のわさから出生する枝は、悉く之れをつまみ去り、養液
をして一本の莖に集らしむるやうにし、夏に至りて苗が長じて漸やく高
くなつたならば、之れを扶くるに細き竹を以てし、傾むき折れぬやうに
すれば、秋になりて花を開らくことが、美麗にして且つ巨大じやと云ふ
ことじや、そうして白きものは雪の如く、黄なるものは金の如く、或は
玉の如く、或は錦繡の如く、絢爛として目を奪ふばかりとなる、

第七十四課 矛盾

韓非子

○ 鬻 ばく、○ 矛之利は、其の鋭利なるはと云ふ心、○ 予盾用に供するもの、盾はたてて、刀槍の如きものを拒ぎて、我が身の安全をはかるものなり、○ 弗能應 とが出来なんだの意、

楚國の人に、楯と矛とを賣りあるくものがあつた、自分のものを
譽めて曰ふ、吾が楯の堅きことは、能く之れをおとしいるものがないと、
又其の矛を譽めて曰ふ、吾が矛の鋭利なるは、天下の物におとしいるべ
からざる物がないと、或る人之れに言つて曰く、おまへの矛を以て、お
まへの楯をおとしいたならば、どうであらうと、其の人は何にとも、

返辭することが出来なんだ。

第七十五課

鵲蚌之爭

戰國策

○易水えいすい川の名、燕の太子丹、荆軻を
おくりしを以て名高き所、○蚌はうぐり、○死蚌しはう死んだは
どりするもの、○死し鵲じう死んだ、○漁者ぎしやな
漁夫を云ふ、

趙の國が燕の國を征伐した、燕の蘇代と云ふもの、趙の惠王に説
いて曰ふ、昨日であつた、臣易水を通り過ぐると、蚌は方さに出てもか
らだをさらして居た、而るに一羽の鵲は、其の肉を啄ばみ食はんとして、
くちはして其の肉を啄ばむと、蚌は兩方の貝を合せて、其のくちはしを

はさんてしまつた、鵲が曰ふ、今日雨がふらず、明日も雨がふらぬなら
ば、きつと死んだ蚌を見るであらうと、蚌も曰ふ、今日もくちはしを出
さず、明日もくちはしを出すこと能はずんば、必らず死鵲を見るであら
うと、兩方とも争ひ合ふて、捨て去ることが出来なかつた爲め、漁者は
あはせて之れをとりこにしてしまつた、

第七十六課

四知

李

瀚

○茂才もうさい漢時代に、天下の學生を試験して、合格せしものを
採用する課目に、博學、宏辭、茂才等の名稱ありし、○謁見てつけんを謁見と云ふ、○故人こじん
ふるきなしみ、○暮夜ぼや日がくれて夜と
の人と云ふ心、○暮夜ぼやなつたと云ふ心、

【講義】後漢の楊震は、茂才に擧げられ、四たび遷りて荊州の刺史となり、其の後東萊の太守となりて、其の郡に行くに當り、道しがら昌邑と云ふ所を過ぎた、此の昌邑には、震が故と擧用せし所の、荊州の茂才王密と云ふものが、其の令となりて居た、それが震に謁見して、夜分になると金十斤をふところにして來て、それを震にあくりた、震曰ふ、故人たる予は、君の人となりを知りて、君を擧用せしに、君は故人の人となりを知らざるは何故ぞと、王密曰ふ、日が暮れて夜分なれば、誰も知るものはないと、震曰ふ、天も知りて居れば、神も知りて居らるゝ、特に我も知り子も知りて居るではないか、どうして知るものがないと言は

れやうやと王密は甚だ其の非行を愧ちて退出した、

第七十七課

男子有三緊

朱

熹

○端整たんせいのふ、○冠くわん巾きんつぎん、○鞋あべつ襪わくは、わらぐつを云ひ、○取しう拾しうさめる、○愛あい護ごもる、○潔けつ淨じようよしの意、○整せい齊せいとのふ、○先せん人じん云ふ、○三さん緊きん三さんつのひべきも、○緊きん束そくつかねる、○寬くわん慢まんゆるく、○放ほう肆し又またわがままなるを云ひ、○端たん嚴げんきびしく、○輕けい賤せんしめらる、○提てい整せいとのへる、○衿きん頭とうさき、○紐ちゆう帶たいおび、○闕けつ落らくおとしたりするを、○照せう管くわん又またさしつしたりする、○汚きう壞わいぶる、○看くわん願がんてみる、○泥でい漬じれになるを云

大抵人となりては、先づ身體の端正整齊ならんことを肝要とする、冠巾衣服鞋襪より、皆須からぐ收拾愛護して、常に潔清整齊ならしむべきである、我が先人は常に子弟共に訓へて曰ふ、男子たるものには、三ツのひきしまるべきものがあると、是れ頭緊、腰緊、脚緊を云ふのじや、頭とは、頭巾を云ひ、腰とは、緋或は帯を以て、腰をつかねるを云ひ、脚とは、鞋襪を云ふのだ、此れ等のものは、きびしく束ねんことを肝要とする、ゆるやかにしてはならぬ、若しゆるやかにすれば、身體がわがましくなりて、端嚴にならぬものじや、端嚴ならぬときは、人のために輕んじ賤しめらるゝ、だから注意するの要がある、

凡そ衣服を着るには、必らず先づ衿のさきをひつさげただし、兩衽の紐帯を結びて、闕落あらしめてはならぬ、飲食には照管して、汚がしたり壊れしめてはならぬ、路を行くときは、よく前後を看かへりて、泥まみれになりてはならぬ、

第七十八課

語言

朱

熹

- 語言詳緩 物言ひが、くはしくて、ゆるやかにするとの心、○ 高言させる、○ 喧聞しい、○ 浮言とを言ふを云ふ、○ 戲笑わらふ、○ 教督とす、○ 聽受める、○ 檢責せめる、○ 過悞あやまり、○ 分解する、○ 隠黙つて居る、○ 餘々と云ふ心、○ 細意にしてと云ふ心、○ 條陳

次第を立てて
申しのべる。○向者を云ふ、○偶爾云ふ心、○遺忘しまふ、○思省へりみる、○
傷忤もどりたりするを云ふ、○事理けがら、

講義 凡そ人の子弟たるものは、須からく常に聲をひく、し、氣をくだし、ことばもくはしくてゆつたりとするを肝要とする、高言してさはいだり、浮言して戯むれ笑ふてはならぬ、父兄や長上が、教督する所があつたなら、粗まさに首をたれて聴受すべきである、妄りに自から議論してはならぬ、長上が檢責したり、或は過慢のことがあつたならば、便ち自から言ひわけしてはならぬ、姑らく且つ隱嘿して、久しくなつたならば、そろ／＼と、こまやかに條陳して、左の如くに云へ、此の事は、恐

らくは是れ、此くの如きものであらう、さきには、當さに是れ偶然わすれたるたるべしと、或は又曰ふ、當さに是れ偶然に、思省の未だこゝに至らざりしたためて、ありしなるべしと、若し爾かしたならば、心をいためることもなく、心に忤ふこともなく、事理もあつから、分明となるであらうと、朋友の分上に至りても、亦當さに此くの如くすべきである

第七十九課

靜坐定心氣

中村和

○有徳公宗の八代將軍吉、○藩邸の和歌山藩主、○二豎童小姓を云ふ、○剃刀そり、○浴室ど

の、
○静坐すはるかに、○心氣安定安定は、やすらかにさだまるの意、○着然くおと、○
模索とむる、○智算を云ふ、○上智智識、

講義 有徳公の、和歌山藩主のやしきに居られた時、ある夜ふたりの小
姓を召され、之れに言つて曰ふ、嚮きに我あやまりて、剃刀を湯殿にの
こして來た、汝等二人共に往いて之れを取り來れ、但し燭を執ることを
許さぬと、二童子は共に入歳である、同じく浴室に至つたが、甲曰ふ、
何を以て之れをさがし得んと、乙曰く、静かに坐したならば、之れを視
ることが出来るであらうと、甲曰ふ、まつくらがりの中じや、どうして
見出さるべきぞと、乙曰ふ、イヤ、心氣さへ安定したならば、剃刀の光

かりを見る事が出来るであらうと、甲笑ひて曰く、吾に一つのはかり
ごとがある、輒ち足をあげて板をふめば、着然として聲があつた、聲
のした所についてさぐりて見れば、果して剃刀があつた、取りて以て献
じて、且つ其の由來を申しあげた、近臣は皆其の機智と妙算とをほめた、
公曰ふ、足にて板をふんで、剃刀をして聲あらしめたは、其の智固より
敏捷である、されど剃刀が若し脚下にあつたなら、必らずきすつくこと
を免がれぬであらう、静坐して心氣を定むると云ふ説は、極めて味ひの
ある言じや、是れをこそ上智と云ふべきであると、

平素未だ曾て喜悅の顔色あるを見なんだ、家に養ふ所の猿が一匹居る、たましく景勝がぬぎ棄てた所の、頭巾をかぶり、走りて庭の樹に上り、景勝に向ひておじぎすること三たびに及んだ、景勝はそれを見て、始めて莞爾として一笑した、左右にある侍御の人々の、景勝の笑ひ顔を見たは、たゞ此の一事ばかりであつたと云ふことじや、

第八十一課 謙信義勇

練習用に付
解を附せず、

第八十二課 九月十三夜陳中作

上杉謙信

○霜滿三軍營、秋氣清けしきは言はれぬ程きよらかに見ゆる、○數行過雁月三更六行に行列をそろへて、空を過ぎゆく雁を見、○越山併得能州景はせるに、能登の國の全れば、早月も三更のころとなつて居る、○遮莫家郷憶遠征一家郷に残りて居るもの共は、景を以てすることを得たは、いや、○何んと云ふ愉快なことであるぞや、○遮莫家郷憶遠征一家郷に残りて居るもの共は、さぞやさぞ、遠く征伐に出て居る我等の身の上を、心配して居ることであらう、

第八十三課 失題

武田信玄

○慶殺江南十萬兵、人のもの共である、項羽の事を引用したのじや、○腰間一劍血猶腥は、今も尚ほ血なまぐさくてならぬ、○野僧不識山川、主共は、此の山川の持主たる我等を知、○向我懇勸問姓名、なたさまでござりまするか、腰をひくとして姓

名を問ふ
のである。

第八十四課

塞翁馬

淮南子

○有ニ善レ術者一よくするもの吉凶禍福を占ふ術を、
の境上には、城塞をきつきて、其の入寇を拒けり、
こゝに塞上と云ふは、城塞のほとりと云ふ心、
○胡狄の名、○弔レ之し其の不幸をといひ
賀レ之るをよ、○丁壯二十歳を丁と云ひ、
○跛之故を以てと云ふ心、
○化不レ可レ極轉化
して行くことは、人智を以て極
むべらざることと云ふ心、

(190)

講義

塞上に近き所の人に、吉凶禍福を占ふ術を、よくする人があつた。
ある時其の家に飼ひおける馬が、故なくして逃げて胡地に入りてしまつ

た、人々は皆來りて之れを弔してくれた、其の父曰ふ、此れなんぞ幸福
とならざらんやと、居ること五六月にして、其の馬胡の駿馬を伴ふて歸
りてきた、人々は皆來りて之れを賀してくれた、其の父曰ふ、此れなん
ぞ災禍となる能はざらんやと、其の家良馬に富む、其の子馬に騎ること
を好み、馬から墮ちて其の髀を折りた、人々皆來りて之れを弔してくれ
た、其の父曰ふ、此れなんぞ幸福とならざらんやと、居ること一年にし
て、胡人大いに塞内に人りて寇し、丁壯のもの共弦を引きて戦ひ、塞に
近き所の人々の、之れに死するものは十に九人あつた、此の家の子ばか
りは、ちんばたるの故を以て、父子相保ちて安心することを得た、だか

(191)

ろく訪はせられてからに、往々にして夜あけに達することがあつた。又國民の軍事に熱中して、國家の根本を培養することを怠らんことを憂慮あらせられ、しばしば當局者に勅して、力を教育と、實業の振作整頓に用ひしめられた。又軍事のさかんなるにあたりては、大膳職に勅して曰ふ、方今大戦はじめて興り、將士共は外に出で、日にさらされ、露にうたれ、國民は國內にありて勞苦熾瘁して居る、朕のみどうして獨り旨甘の奉をうけて居られやうやと、遂に常時の膳を減少せられ、大饗の外は、盛饌を斥けてめしあがらぬこととなりた。尤も軍需には大御心を痛めしめられ、侍臣に命じて、軍中にて用ゆる所の、乾菜、粉豉、餼糧等を献

せしめ、一々親から之れを嘗めこゝろみたまへ、更らに有司に勅して、源々接濟し、やゝ缺乏することあらしめてはならぬと仰せられた。又しばしば侍臣を軍中に遣はし、將士の勞苦を問はせられ、且つ煙草、酒などのやうなものをわかち賜はれた。そうして其の地位に由りて差等があつたが、しかし一兵丁の微賤なるものにも、あまねく行きわたらざることはなかつた。だから人々はたまものを拜して感泣し、敢へてたやすく之れを用ゆることをせず、大敵をやぶり、大勝利を奏して、祝賀を稱する日を待て、はじめて出して之れを用いた。そうして凱歌と、萬歳の聲とは、相和してさこゆるのじや、振古未曾有の大戦に際し、上下の人々